家庭雜誌

第六拾五號

德富猪一郎著

國民叢書 第八册

風雲漫錄

定價拾五錢
郵稅四錢

本書、端を大纛西下の日に發し、終を大纛東還の時に結ぶ、其間殆ど一星霜、記事的確、議論正大、而して文字情華を含む。——「大纛隨行道中記」宣戰の大詔煥發して大纛西下となり、天祐人和、沿道數百里、總ての光景如何ばかり新鮮快活なるよ「樺山と野津」、此は平壤大勝利の代表者、彼は海洋島大勝利の代表者「戰爭は如何にして行はれつゝある乎」第一總論、第二運輸、鐵道、第三鐵道、兵站勤務の事、此中に盡く「亂暴本部」亂暴の裡樂地あり、如何に忙しき通信者の生涯の樂しきよ。「未曾有の議會」、板敷に天幕、竹やらひ、質素、簡易、直截、空濶、時は征清の眞最中、處は臨戰の地、而して人心潮し來て方に火の如く、錦の如く、花の如し、眞に千古未曾有。「伊藤の朗讀演説」而かも此千古未曾有の時に於て。「米仙の畵天覽に入る」滿身の感激、畵くところ何。「大本營の位置進まん乎退かん乎」、論なきのみ。「露帝の崩殂と歐亞の大勢」言ふ所果して驗なき乎。「別莚漫興」何等の光景!「有栖川總長殿下」我摸範的皇族を見よ。「大纛の渡海大本營の進轉」「今日此時「丁汝昌」四百州第一流(其勁節に於ての)人物、記者の同情は其敵たるに於て却て甚し。「清國侮る可らず」「性相近し習相遠し。「武士の情け」眼底有ゝ涙、皮下有ゝ血、慷慨にして義俠なる日本武士の大精神は北洋艦隊殄滅の際に於て最高最美の點に達したり、而して之を代表したるは伊東海軍中將。「大本營」征清役の大骨子、其組織、其人物、其活動を提げ來て極力論盡す、本書中一種出色の大文字。「相思一片」詩思湓涌。「大總督府の進轉」。「船中雜興」諸名將の面目、躍然として出るが如し。「金州瞥見」。「遼東の春色」、「鉦瓦塞よりの短信、短なりと雖旨味殊に長じ。「歸朝の消息」「彥島よりの家書零叉碎」。「大元帥陛下及凱旋の軍隊」、也た正々、也た堂々此他「朝鮮政府の改革」。「日清現今の形勢」。「臨時議會の召集」。「廣島の天然と人」。「大本營地の天長節」。「明治廿七年」。「明治廿八年」。「媾和使來」。「媾和使歸る」。の諸篇あり讀者諸君願くは此書をして、徒らに過去の記錄たらしむる勿れ、

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿八年十一月十日發行

家庭雜誌第六拾五號

目錄



數 四百七十三頁

新帝ニコラス二世

十五錢

家庭雜誌第六拾五號

（明治廿八年十一月十日發兌）

社説

獨立の氣風を養ふべき事

國の獨立は家の獨立より始まり、家の獨立は個人の獨立より始まる。交通に貿易に世界を横行し、以て國家膨脹の基礎を立る如きも、皆此の獨立氣風の膨脹したるものにあらざるはなし。

去れば小兒の時より獨立の氣風を養ふは大切なるか中にも大切なることにて、殊に日本の如き家を社會の本位として個人を本位とせざりし國に於ては、やゝもすれば小兒に依賴心多く只管に父兄の庇護を待たんと欲する傾なからざるを以て、最も注意して之か獨立心の養ふを怠るべからざる也。

獨立心獨立氣風など申しては甚だ六も、つまる所何事も親の厄介にな拔き去り、成長して自ら一家を積極的には世界を雄飛するの基となつまでも親がゝりとなることを耻るに是のみ。從て之が養成も別に六ヶ敷事にあるべく小兒をして自家の事は自家之をなすの慣習はしむるにある也。

例之は小兒をして自ら自家の財産たる翫具を管理せしむることは勿論、少しく長じたらんには家室の許すかぎりは成るべく一定の室を與へ置き、之か洒掃より翫具書冊机の類皆父兄の補助と注意とを以て其整理を保たしめ、以て其一室に於ける主人の位置を見出さしむる如き、其獨立心を養ふの一助たり。

又或は學業勉勵の賞褒として物品を與へ、或は特約せる勞働の報酬として金錢を贈りて之を貯蓄せしめ、以

家庭雜誌第六拾五號

（明治廿八年十一月十日發兌）

社說

獨立の氣風を養ふべき事

國の獨立は家の獨立より始まり、家の獨立は個人の獨立より始まる。交通に貿易に世界を横行し、以て國家膨脹の基礎を立る如きも、皆此の獨立氣風の膨脹したるものにあらざるはなし。

去れば小兒の時より獨立の氣風を養ふは大切なるか中にも大切なることにて、殊に日本の如き家を社會の本位として個人を本位とせざりし國に於ては、やゝもすれば小兒に依賴心多く只管に父兄の庇護を待たんと欲する傾なからざるを以て、最も注意して之か獨立心の養ふを怠るべからざる也。

獨立心獨立氣風など申しては甚だ六つかしき樣なれども、つまる所何事も親の厄介にならんと思ふ依賴心を拔き去り、成長して自ら一家を成すべき土臺を作り、積極的には世界を雄飛するの基となし、消極的にはいつまでも親がゝりとなることを耻るに至らしむること是のみ。從て之が養成も別に六ヶ敷事にあらず、唯成るべく小兒をして自家の事は自家之をなすの慣習を養はしむるにある也。

例之は小兒をして自ら自家の財產たる翫具を管理せしむることは勿論、少しく長じたらんには家室の許すかぎりは成るべく一定の室を與へ置き、之か洒掃より翫具書冊机の類皆父兄の補助と注意とを以て其整理を保たしめ、以て其一室に於ける主人の位置を見出さしむる如き、其獨立心を養ふの一助たり。

又或は學業勉勵の賞褒として物品を與へ、或は特約せる勞働の報酬として金錢を贈りて之を貯蓄せしめ、以

て當に自家の所有品は自家之を管理せざるべからざるのみならず、何物にても之を得んと欲する時は必ず自



家の勞働を以て之を買はざるべからざることを知らしむるを要す。是亦獨立心を養ふの一助たれば也。

若し更に幼稚なるものに至りては、夜は成るべく母の寢臺の外に一個の小寢臺に於いて睡らしめ、晝は成るべく適當の翫具を與へ置きて、自ら遊ばしめ、而して母は唯傍に在りて其危險と其倦厭とを避けしむべし。

要するに其方法は固より種々なりと雖、小兒をして談話上行爲上常に自家の事は自家之をなすべきものなるを知らしめ、其欲する所は自ら之を得ざるべからざるを覺らしめ、而して自家の事を他人に托し、其欲する所を勞働なくして之を得んとするは、人の最も恥づべきことなるを認めしむるは、實に獨立心を養ひ獨立の氣風を養ふの根本たり。

去れば天は自ら助くるものを助くとは、則ち人生の最初より人生の最終にまで記憶すべき諺なるを知らずや。

秋色無遠近、出門盡寒山、
白雲遙相識、待我蒼悟間、
借問盧耽鶴、西飛幾歲還、
（李白）

実談

横井小楠先生の話

蘆花生

肥後の熊本から東南二里ばかり離れて、沼山津と云ふ小村がある。四方一面海の樣に廣々とした田畑の中に

あつて、遙に阿蘇の煙を東北に眺め、飯田山を近く前に望み、藻陰に鮒の潜む沼山津川を帶にして、眺望の好い所であるが、併し村其ものは竹藪や雜木に埋もれ、夏はまことに藪蚊の多ひ、梅雨の頃はめり入る樣にしめつぽい、明るいものは背戸の赤椿の花ばかりと云ふうど暗い寒貧の村で、秋の暮などは木からし騷々しく吹きすさみ、「何に世渡る家五軒」の句も思はれる。此村こそ、今から四十年前、佐久間象山先生と共に、鎖國の日本に生れて五洲の大勢を見破つた日本の兩眼球と云はるゝ横井小楠先生の棲まれた村で、其家は今も沼山津川のほとりの竹藪の中に面影をとゞめ、また先生の遺髮を藏めた石碑は、此も村はづれの畑中に石垣つきあげ竹垣結び廻はした中に、松風に吹かれて立つて居て、心ある百姓は一寸其前を通るにも鍬をおろし目禮して行く。若し閑に任せて村中を尋ねたならば、先生の釣の伴をした、いや新芋を掘つてあげて先生に喜ばれた、など云ふ履歴つきの老人がいまだに生きて居て、昔懷しい聲に先生の事を語るであろう。



先生が十三の歳經國の志を起されてから、色々苦辛して大儒先生となり、更に進んで世界的眼光を有する哲人となり、越前侯松平春嶽の師となり、明治維新の初年參與となつて遂に非命に斃れられた迄の生涯は、最早人のよく知る所であれば、此處には唯先生の家居平生の狀態を順序なく話すとしやう。先生の沼山津村に住まれたは、安政二年から慶應三年までの間で、越前に行かれた年月を除けば、大約十年ばかりの間で、先生の位置も定まり、識見も熟し、活計もやゝ豐かになつて、夫人を迎へ子女を擧げられたのも、此間であれば、先生の家庭生活は先づ此十年間と云つても宜い位である。

先生の沼山津に移られた時は、年方に五十一才、父兄は已に沒せられて、母上獨老健であつた。先生の母上は中々氣丈な嚴格な人で、滅多に笑ひ話などせられたことのないと云ふ程であつた。先生の小供の時の躾方も中々嚴重で、後先生が五十白髮頭にかぶつて、肥後の横井と云へば日本に幾人と云ふ人物の中に入る樣になつても、母上の眼からは矢張以前のトンボ髮腕白の「平四郎」で、來客の時でも、門弟の前でも、子供の樣に先生を叱られる。菓子など、母上の貯へて置かるゝを、先生がこつそりやつて仕舞ふ。そこで母上は菓子器をあけて見て紛失露顯すると、母上は大音聲に『また平四郎だらう』と叱らるゝ聲、家内に鳴り渡つて、先生も門弟の手前此には困ると頭を掻れた。實に天下の士横井小楠を叱らん者、此母上のみであつた。先生の母上に對せらるゝも、例の二十四孝的の孝行ではなく、情の到る所天眞爛熳、小供の母に對する樣で、例へば母上に肴を進めやうと云ふ時は、自から『此頃は一向肴を食はぬ、何か食ひたいナ』と吾事にして之を促すと云ふ鹽梅であつた。母上の病氣せられた時などは、寢せ起し撫で摩りから二便の世話まで、決して人手に渡された事はなかつた。後、先生越前にて春嶽公の奧方より母上にとて紋付の衣裳を賜はつた時、先生の詩に

表黒裡紅九曜鮮、恩深阿母壽如レ仙、
家郷千里亂山雪、何日捧持舞ニ膝前一、

とある。また

阿母七旬杖作レ行、秋風吹起倚門情、(中畧)
兄喪弟逝吾爲レ客、誰復膝前侍ニ酒觥一、

此も越前にあつて母上を思はるゝの詩である。

兄弟の仲とても同樣であつた。家嚴淇水翁の話に、自分十六の年一つまさりの叔父某と横井家に行つて泊つた事があつた。其時先生は三十歳で、丁度其日時習館

の居居長となつて三人扶持賜はる樣になつたとて歸宅して居られたが、其夜自分叔甥は玄關に、先生兄弟は坐敷に寢られ、終夜襖越しに先生兄弟の寢物語を聞いて、小供心に深く感じた事がある云々。兄上僂麻質斯で足痛非常に劇しかつた時も、先生は毎日〳〵湯をもつて兄上の足を溫めて、門弟が御かはり申ませうと云つても、イヤ〳〵斯樣な事は骨肉でなくてはいけぬ、他人は遠慮して却て困る、とて必ず自身にせられた。兄上も酒の上などでは、朋輩に向つて『乃公の弟はドウして、乃公の弟はドウして』と自讃せられたと云ふ事である。兄上逝去後、先生の嫂に事へ二子一女を愛撫教導せらるゝ心遣ひも、言語同斷で、先生は實に情愛の細かな、心のよく行き届く人であつた。時雄氏みや子などは、先生五十過の子供であれば、宛ながら孫の樣に愛せられた。

又雄（先生の令嫡横井時雄氏也）讀書修業且英學、決

しておこたり不申樣、呉々申入候。自然おこたり候えば、直に御申越し可被下候。夫々存念有之候。彌以出精致し候えば、墨筆の類は申に不及、色々の書物下し賞美可致候。みなさんおこり御申聞け聞き入不申候えば、先頃遣はし候かたびら御取り上、何も御遣はし無之樣に存候。人物宜敷相成り候えば、衣類其外樣々之くわし遣はし可申候事。

* * * *

おみや（先生の女海老名みや子也）ふみ見事々々、出精之段驚入申候。正月も十五日頃よりは手習初り可申候、暮れ正月の間には、手まりうち想ひやり申候事。

前は明治元年五月上野戰爭濟んで奧羽征伐始まらんとする大混雜の時、後は同年十二月即ち先生遭難前廿五日の手紙である。

先生は身の丈五尺に足らぬ小男であつたが、顏の搆へ

大きく、色淺黑く、眞黑い眉きり〻と釣り上り、眼の中きら〳〵光り、顴骨高く出で〻口の大きい、活々した風采の人で、眼明手快、非常にすばしこひ人であつたと云ふこと。文久二年の頃、江戸で刺客に切込まれた時も、同輩は二人ながら斬り倒されたか、先生はソレ來たと云ふより早く、突と立つて刺客とやりちがひに梯子を下りて、無事に逃げられた。また或時宴會の半、大力の大男某先生と議論を始め、おのれ横井の小男め、一と攫みと端にか〻つて組み付くと、先生は身を沈まして相手の股下にもぐり込み、相手の睾丸を驚抓にして、難なく强敵を挫かれた。また或時何の某と云ふ士の不行蹟を詰責するに、其士二刀使ひの名人であつた故、皆々恐れて居ると、先生は平氣に其男を呼び寄せ、戸口を入ると飛びか〻つて其兩刀を引つたくつたれば、何も無事に濟んだか、後此士同樣の詰責うけて腹を立て、二刀を以て數人に重手を負はせたと云ふことである。先生擊劍は新陰流で、隨分烈しひ使ひ手であつたとの事。居合は名人で、竹箸を疊の上にたて〻、拔き打ちに竪に眞二つにせられた。で〻遭難の時も、病氣あがりと云ひ、七十近ひ老軀でありながら、銃聲を聞いて駕籠から飛び出で、短刀に敵の刀痕幾箇をとゞむる迄に働かれたのである。

先生の沼山津に居らる〻間は、讀書考案、書生敎養、重要なる書信の往復、おり〳〵は吉田松陰坂本龍馬等有志家の來訪、左もなき時は夜雨に沈吟して

十年無レ限風塵客、　歸臥二故山一聽二雨聲一、

と歌ひ、或時は秋晴に一家打連れ、辨當持ちて野遊に出で、

小兒携レ餠大兒飯、　到處團欒倒二一樽一、

と歌ひ、或は家庭團欒の晩餐、或は隣家老農の談、或は酒、或は菜、或は菊花、併し先生の重なる閑事業は漁獵で、殊に漁であつた。鐵砲獵に出かける時は、大

抵粟の飯の辨當に味噌漬で、鐵砲肩げてのこ〳〵歩かれた。漁は釣網皆得意であつたが、中にも蚊頭ひきは名人で、此は大抵雪降りの日である。蚊頭は諸君御存の通り、鈎の細く毛があつて虫見た樣なもので、之を數本糸につけ、別に餌はさゝず、釣手は左に布袋を持ち、右に竿を握つて、淺瀨に立ちながら、颼的一聲糸を飛ばし、流に逆ふて引くと、鮎鮠なんどが飛んでかゝるもので、此は中々熟練が入る。夜網うちは、先生のまだ熊本に居られた頃は、大抵午後の四時半頃から弟子と網肩げて三里ばかり西南に行き、夜に入り弟子に松明持たしながら、河中を一里ばかりうちて上り、またうちて下り、鷄鳴の頃漁宿について辨當を食ひ、それから濡れ網を肩にかけながら、三里の道を熊本まで歸ると、夜明になり、其より直ぐに會讀と云ふ都合で、隨行の弟子も閉口した。此外漁と名のつく事は、先生大熱心且大名人にて、別けて沼山津に移られてからは、家の前は直ぐ野川で、川下は湖につゞき、柳の蔭、藻の下、紅蓼の洲、碧花の崖、長堤の落暉、湖上の秋風、所として時として釣もし網もするに恰好ならぬはないと云ふ有樣で、先生は始終一艘の舟を屋敷前の川ばた柳に繫いで、秋晴れて田色づき空碧にして山近く岸上の紅蓼鮮やかに水に映つると云ふ小春の時節になると、

不レ釣二前津一即畫湖　機心已去狎二鷗鳧一

と歌ひながら、舟に棹して獲物の多い太公望となられた。實に先生が俗論に妨げられ、朋黨に苦められ、窮屈千萬なる間の悶々を慰むるには、漁こそ先生の忠臣であつた。先生の朝廷の召に應じて京都に出でらるゝ折、故宮中顧問元田永孚先生は、先生の行を贈りて、功成り事終らは「笑棹煙波舊釣船」と歌はれたが、間もなく先生は非命に斃れ、沼山津の家は他に渡りて、釣船も誰の手に渡つたか知れぬ樣になつて仕舞ひ、は

ては元田先生自らも黄泉の人となつて、今は唯沼山津川のみ昔にかはらず柳の下藻の上を淙々として流れて居る。

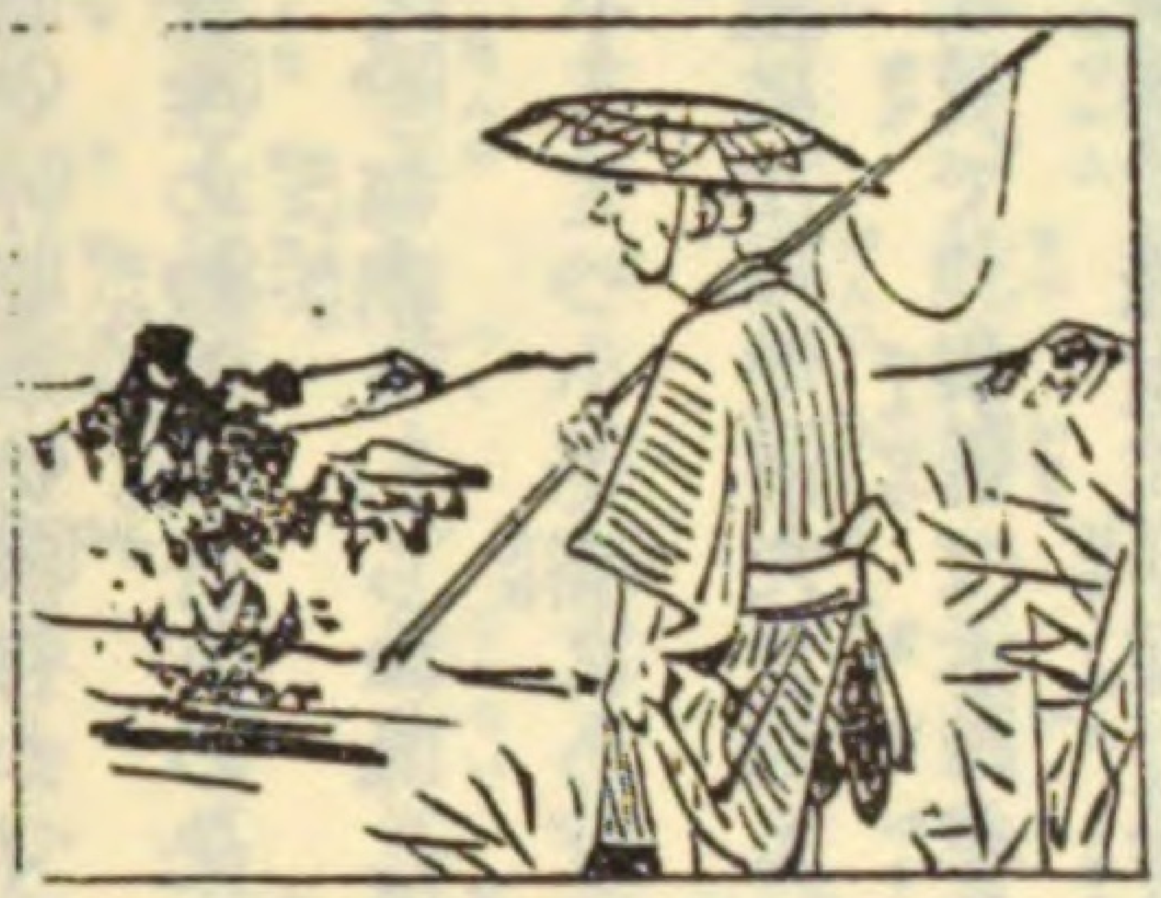
佐久間象山先生は、平生綸子の道袍を着て、虎の皮に坐し、屹と構へて居られたと云ふ話だが、横井小楠先生は、萬事極々手輕で、松平春嶽公との間も極簡易なサッパリとしたものにて、春嶽公の奥方いさ姫自から團子を作り、先生に馳走せらるれば、先生、近頃は大分御上達でムりますと笑はるゝと、春嶽公は、ドウも内の御前樣の御ぬらひには困ります、と打笑はるゝと言ふ樣な鹽梅であつた。先生は右の通り何事も手輕を旨として、媼嬶權助とも打くんで話された。一躰先生は百五十石の極輕ひ且清廉故貧困な士族の家の二男に生れて、若ひ時から色々困難をせられたれば、苟且にも蒲團子の風はなかつた。酒失の爲江戸より歸國を命ぜられた後なんどは、四五年が間六疊敷の一ト間、しかも其六疊敷は、壁はボロ〳〵壞れかゝりて、雨戸はなく、藁蓆を軒より釣り下げて雨風を凌ぎ、青竹を束ねて椽を作つた六疊敷に寢起きして、飯焚水汲の加勢しながら讀書考案はては門弟の會讀まで皆此六疊でせられた位であつた。然れば先生は中々世馴れて實着の中に粗豪の所もあつて、元田永孚先生の優美嫻雅貴介公子の風あるを戲れ嘲つて「元田は平家武士だ〳〵」と云はれた。此頃の先生の苦學につひて、一の話がある。家嚴の話に、自分此時先生に入門したが、先生さへ破れだゝみの六疊なれば、素より明間などあらう筈なく、三疊敷に下男と同居して學問した位の事であつた。或時先生の行燈や障子襖など所々に「道就於用不是」と云ふ程子の句を書いてあるのを見て、先生此は何でムいますと問ひたれば、先生、これは三年前、心に不審があつて考ふる爲めに書て置いたのだが、此頃やう〳〵分かつたと云はれたので、自分は此位の一句に三年と

はと思つたが、よく／＼考ふると此は吾考の淺薄なのぢやと深く曉つた云々。横井先生の思想を練らるゝことは、右の通であつた。

先生酒量は弱かつたれど、酒は好きな方であつた。江戸で酒の上で大氣焰を吐き其爲め歸國を命ぜられた後は、暫らく禁酒せられたが、併しぶり／＼茶の間の神棚の小德利の神酒が不思議になくなることもあつた。先生の嫂君酒好きの先生が禁酒さるゝを氣の毒に思つて、毎朝そしらぬ風して神棚の御酒德利に酒をなみ／＼とついで棚にあげて置かるゝと、明日は必らず空虛になつて居たと云ふ話もある。一躰先生は餘程陽氣な質で、辨舌は木戸孝允も横井の舌劍と云はれた程の快辨、先生の話聲は始終門外に聞へる程で、先生が來らるゝと一座急に賑やかになつた。隨分癇癪は劇しい方であつた。併し赫として怒らるゝ時は火の出る樣であつたが、過ぎるとあとは誠にサッぱりして、夕立あがりの樣に涼しく、叱られても一向苦にならぬ。何樣に敵對する者でも、折れて來れば洒然として腹藏なく、如何に嚴責する者も改むると先生の喜は限りなく、行雲流水まことにさら／＼とした大快活の人であつた。門人を敎養するにも、規則がましい事一切なく、おの／＼其人／＼によりて開發の道を授け、樂んで進む樣にせられる。其處で先生の薰陶を受くる者は、欣々然として化すると云ふ風で、沼山津に行く時は、一二里も手前から急に足が輕くなる樣に思つた、とは門弟の家嚴の話である。師弟の分ははつきりして居れど、至て心易く、碁なんどうつては、互に相手の手を握つて先後を爭ふと云ふ風であつた。

先生は眞に思想の人であつた。厠の中でも、漁に出ても、ふと考の浮むと、必ず十分考へ盡すまでは置かぬ。修行心は非常なものであつた。門弟が來る、講習する。百姓が來る、作の事を聞く。漁師が來る、商人

が來る、媼が來る、それ〳〵相手になつて話したり聞いたり。と云ふ鹽梅で、門弟なども故郷から出で先生に逢ひに行く時は、色々心しらべして、先生の其地方



に關する問に答ふる準備をして行く、と云ふ位であつた。先生は何處に行つても、空しく暮らさぬ。女などと話すには、股引のたち様足袋のかた、家事の心得何くれと利益になることを注意される。百姓商人に對しても、一々細かに話される。併し時々は鶴の聲を雀の仲間に聞かす事もあつて、『なあに、天下を取るのは易ひ事だ』と文盲農爺を捉へて述懐されたこともあつた。すべて眞ならぬ事おつくうな事表面の事大きらいにて、村中を馬にて通らるゝ時。百姓などが出逢つて。御士様ゆゑ土下座をすると、先生馬上から手をふり聲をかけ、なに、それには及ばぬ〳〵と云はれた。沼山津の村人は先生を誇つて、先生の墓は今も塵一つ落ちて居ない。

『人間は白骨にならぬと事は出來ぬ』とは先生の常に云はれし言で、名利の關は早に越えてしまわれたれど、併し中々仙人の樣ではなく、身は沼山津の小村に隱れても、日本と云ふ考は不斷先生の胸に蟠つて、憂國の念片時も心頭を去らなかつた。

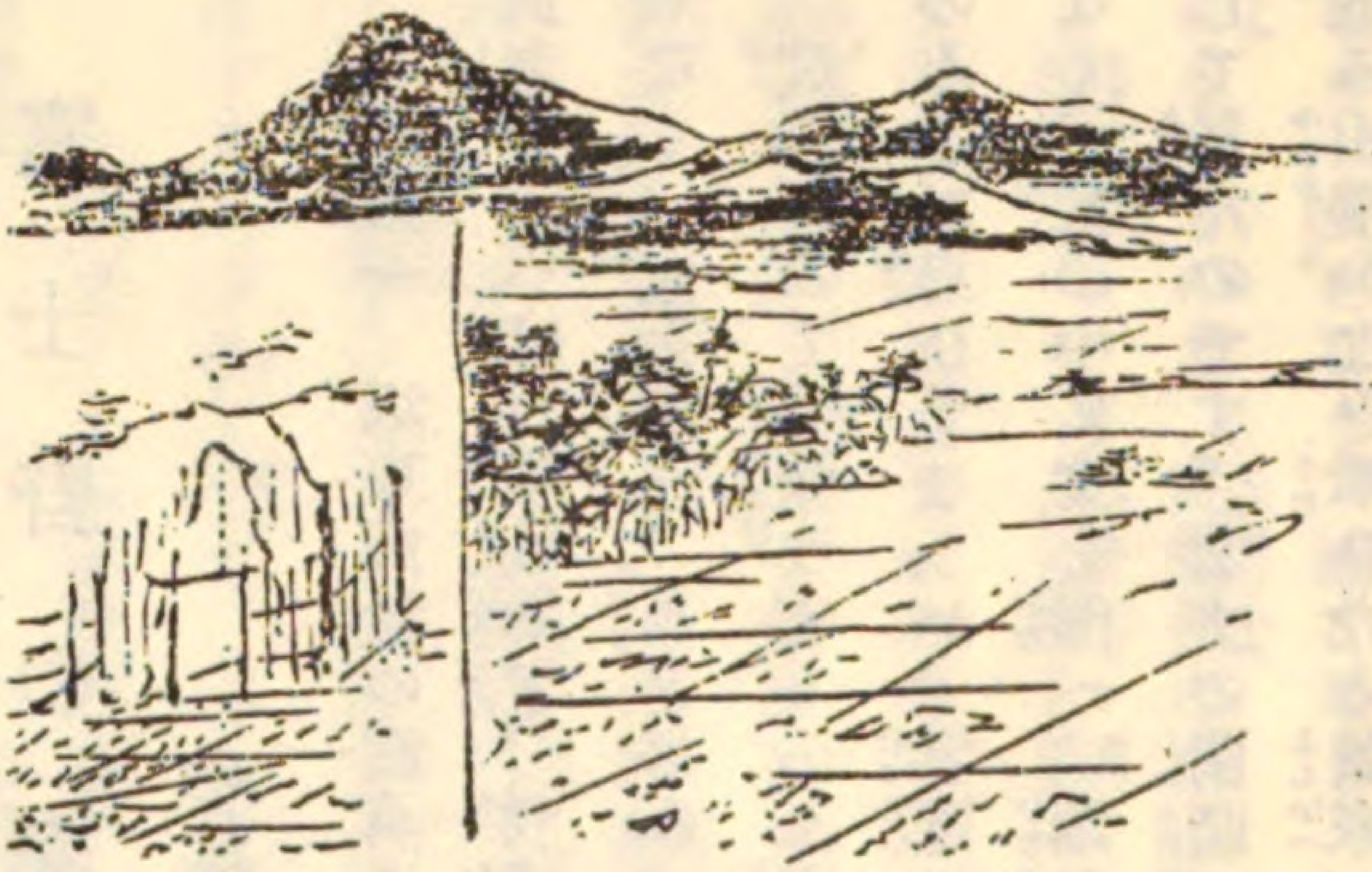
塵俗萬緣付二水流一、種レ蔬拂レ草不レ知レ憂
閑來總隨二老農事一、一種難レ忘七道州

魚を釣つても、文王あらば太公望の事をやつて見やうと云ふ抱負は、五尺の短身に溢れて居た。坂本龍馬が先生を沼山津に尋ねて來たことがあつた。酒が出て、坂本は例の雄辯で天下の英雄を舌頭に評品する。誰は英物、誰は鈍漢、何某は有名無實、西郷は、大久保は云々云々、先生盃右手にとつて、乃公はドゥだ。坂本、

先生は先づ二階に酒でも飲んで、西郷や大久保や子供等のする芝居を見物なさるがようムひます、大久保等が行きつまると先生に御尋ねに参りませうと云つた。

先生は笑つて頷かれた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊



早ひものは月日、先生が召によつて、此沼山津村を出で京都に行き、初て此抱負をのばす機會に際しながら、空しく刺客の刄に罹られてから、早や二十八年過ぎた。南禪寺の墓は苔青々と石も雨風に黒み、沼山津の川流れ流れて此處に釣りした人の面影も早や遠い昔となり、記憶のみ立ちもさらで今に殘つて居る。

此春、麥の芽の四五寸のびる頃であつた、記者は歸省して或日此沼山津村の方角を過ぎ、薄霞海の如く立ち渡る麥圃のあなたに、悠々として眠る竹樹の村を望み、良久しく茫然として畑中道に彳んだことがあつた。

小兒の世界

私は前回迄科學上の御話を致しました、科學の世界は、之を究むれば究むる程、愈廣大にして、其窮極はありません、大に於ては大の極なく、小に於ては小の極なく、極大極微なるは科學の世界です、其故科學の事は彼丈に止めて、是よりは史的人物、若くは事實に就て御話しませう。先づ其第一として撰びましたは曾我兄弟で、題名は

富士野の譽

嵯峨のや主人

第一　坂東武者の武勇と風流

坂東武者と云へば、唯亂暴者、我武者、智慧もなく、文辭もなく、血を好み、勇を好み、爭鬪を好み、狩を好み、武を好みて、情などゝいふ事は、露聊かも知らぬ者のみとお思ひでせうが、實際に於ては、決して左樣でなく、武の中に文を備へ、剛勇の中に優美の情をも有して居たのです。勿去の關頭に駒を止めて、道もせに散る山櫻かなを歌ひたる義家の雅量生田の森の敵陣に梅花一枝を箙に挿みて、奮戰激鬪したる梶原源太の風流、五條橋頭に横笛を弄びつゝ、叡山の大法師を愚弄したる源九郎の風流、是皆坂東武者が、武中に文を脩め、剛氣の中に風流の情を有して居た證據では有ませんか

殊に望む、彼等の剛氣と風流とは、如何にして其家庭に於て養はれし歟を知ることを、私は其爲め、此處に曾我兄弟を撰びました。曾我兄弟は、坂東武者の好標本として誠に好人物では有ますまい歟、五郎が剛勇の中に、自づからやさしき優美の情を有したる、十郎が優美の中に、自づから坂東武者の勇氣を備へたる、孰れ劣らぬ梅櫻では有るが、我々は五郎に於て、專ら坂東武者の豪放を認め、十郎に於て專ら坂東武者の優美を認めます

第二　曾我兄弟の精神

曾我兄弟に於て最も尊ぶべき所は、彼等が不撓不屈の精神です、事を爲すは人に在り、成る成らざるは天に在りといふが、然も其爲すといふ事は實に難い、一年や二年は隨分奮發するが十年、二十年、三十年となると、人は往々疲れる、其精神も始の如くは奮はなくなる、若し其精神が始終一貫、然も消長增減なく、焔々

として常に燃ゆるが如きもの丶あるに至りては、是中に線香一本の火を以ても、倚三千世界をも燒盡さんと欲する程の情熱があるに據るので、如何なる艱難辛苦にも撓まず屈せざる底の積誠が在るに據るのです。此情熱と此積誠、發して忠となり、孝となり、義となり、信となり、貞となり、禮となり、智となり、悌となり、愛國心となるので、此精神の向ふ所、山をも倒すべく、海をも翻へすべく、其目的を達せざるまでは、何處が何處までも進むで止まぬのです。曾我兄弟のは、此情熱と此積誠とが。發して孝となッたもので、一萬が五歳、箱王が三歳の昔より、己れ祐經、今に父の讐、思ひ知らせてくれんず、と思ひ込だ魂、十有餘年の星霜を經るも終始變はらず、終に富士の捲狩の夜、首尾好忍び込んで父の仇を討ち、名を後代に輝したのです。

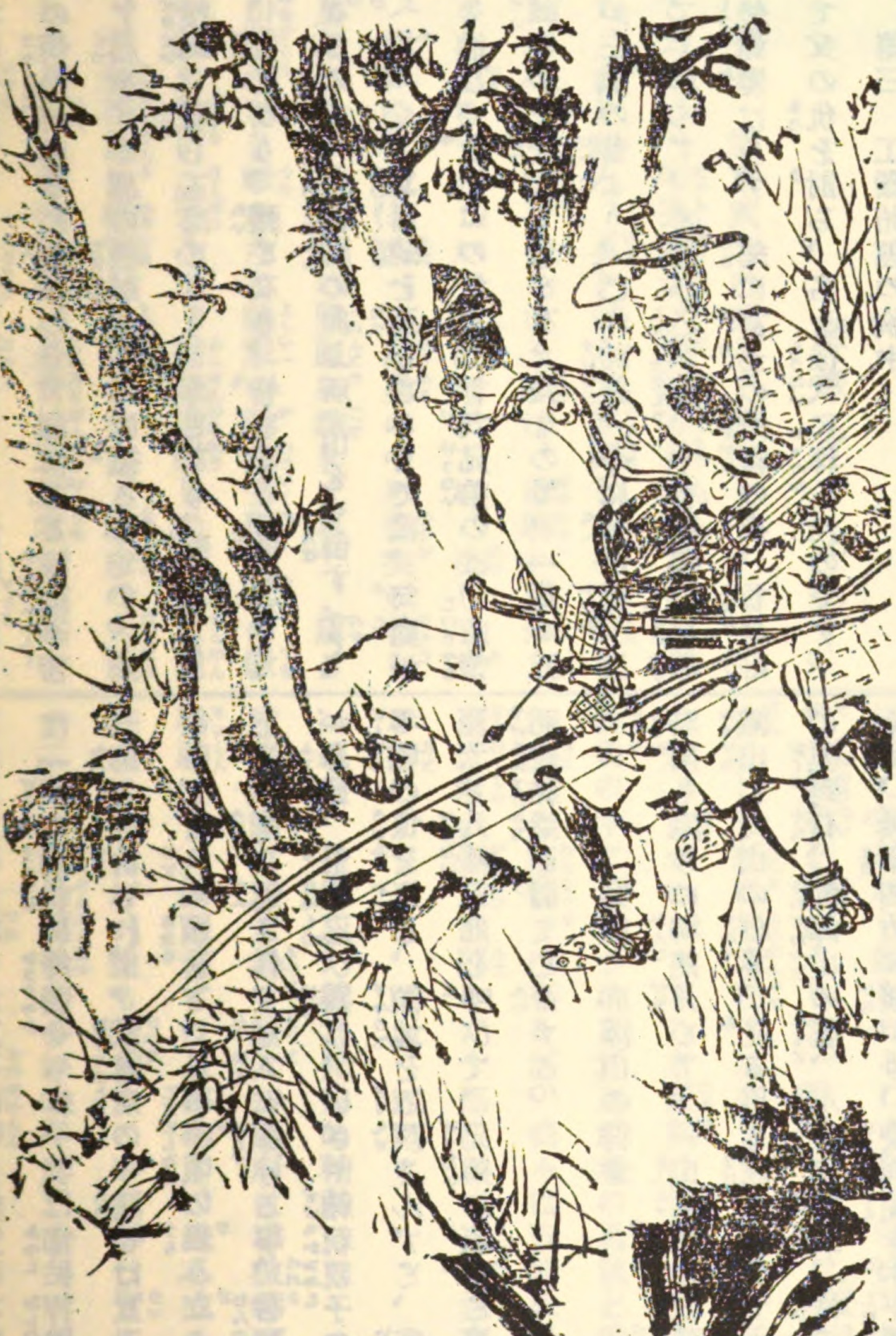
第三　工藤祐經の胸中

あ丶父上ましまさば、我は伊東河津兩莊の主として、夥多の家從にかしづかれ、多くの大名にも打交りて、誰劣らず世に時めかんものを、父上のなき斗に、領地は一族の助親に押領せられ、我は都に押登されて、國へ歸るを許されず、武者所の一臈とはなりたれど、心ならずも人に頭をさぐる事年頃の恨みなるに、剩へ妻をさへ奪ひ返されて他人に嫁ける事、言語道斷の入道が擧動、最早忍び難し、いざや祐親親子の者を討て、年頃の恨を返し、領地を取戻さんずと、家子の大見小藤太、八幡三郎を呼びて、兄弟が祖父と父とに當る、祐親祐通を討てと命ずる。

第四　赤澤山の狩倉

時雨も定めぬ神無月とて、一山盡く紅葉して、錦を織出した山の紅葉、見る目も眩ゆき斗です、此處伊豆の奥野口、赤澤山の麓、小倉の退立、椎の大樹空に聳えて、枝葉四方に擴がり、晝倘闇き木下闇に、柿の直垂に小袴穿き、白木の眞弓をわき挾みて、山下を伺ふ

二人の曲者、武士歟と見れば、其打扮は獵師、獵師歟と見れば、其風采は武士、其面魂の何處となく凄味を帶たるは何れ一曲あるべき者と見える、あゝ是は是誰あらう、工藤の郎等、大見八幡の兩人です、彼等は祐經の賴みによりて、



伊豆の奥野の狩倉の歸路を待受け、伊東親子を討たんとて、此處に矢尻を磨で居のです。」斯る事の有らうとは、神ならぬ身の知らぬ坂東武者、おひ〳〵に引揚來る、其中に伊東親子の者、少し引離れて出來る、河津三郎助道が其日の

装束には、「秋の花野の摺畫せしは、あひだ〳〵に柿ひきたる直垂、大班の行縢のゆたかに廣げなるに、狩矢の料にかりそめに作らせたる、鶴の本白の九つ指たる矢を負ひて、重籐の弓の眞中とり、萌黄にてうら打たる竹笠を峯の嵐に吹せ、曉といふ名馬の鴾毛なりける、長七寸にはづれたるが、五臓太にて尾髪わくまで足たるに、梨地蒔繪の白覆輪の鞍に連雀の鞦の、山吹色なるを、芝打長にかけきせ、白轡をはませ、紺の手綱に同じ色の腹帶を強くしめてぞ乘たりける、主も究竟の馬乘、馬もきこえたる逸物なれば、伏木岩石をも嫌はず、さしくつろげて歩ませたり、あとには一騎も近かず、先には土肥次郎が手の者ども、谷を隔てうちのぼる、後に人こそなかりけれ、頃は神無月十日餘の事なるに、ふりみふらずみ定めなき、時雨に今ぞそめはてし、木々の梢のもみぢ葉の、風よりさきに散ぬべし、と誰かはおもふべき。」八幡三郎が放ッた大鹿矢、羽ぶなり高く飛び來て、河津が乘た馬の鞍の、後の山形をばつと射破つて、行縢をば少しさしさげて、前ほろへと射出しました、大事の痛手なれば、何條以て叶ひませう、鞍を返して落馬に及ぶ、敵は誰ぞと呼ぶ聲に、工藤祐經こそと答へて息絶ました、時に安元二年神無月十日、生年僅に三十一歳、嗚呼哀れ、さしも坂東に名を得た勇士で有たが、空しく赤澤山の露と消ゆるとは、脆きは人の命では有ませんか

御笑草

肉食の理由

料理人「旦那、いかゞです、鱈の天麩羅は。
舩客「肉食は罪だ、己は決してやらぬ。
料理人「ナ、ナルホド、しかし味は餘程ようげすぜ。
舩客「しらぬ、しらぬ、いらないと言ふのに。
ジイ、ジイ、ジユウ、ジユウ、
舩客「フン、なにさなく惡くない匂がするな。
料理人「旦那、おいやでせうが、此腹の中をご覽じろ。

舩客「ナニ、腹を斷ち割つたとか、酷い事をする奴だな。

料理人「これこの通、小魚が澤山はいつてをります。

舩客「ウン、ナルホド、こいつは許せぬ、この惡漢め、この大口で無闇に呑み込み、罪なき者を害するか、因果應報、それなら己が今、此處で敵をとろ、一皿早く早く。

料理人「ハイ、ハイ、あげたての好い處を差し上げます。

舩客「ヤレ惡や、ヤレ惡や、思ひ知れ、隨分旨い、隨分旨い。

文藝

簟狩

湖處子

颯と梢を拂つて通つた風に、飄へる二片三片の落葉、あるものは軒の蜘蛛の網にかゝり、あるものは手水鉢の中に舞ひこみ、あるものは庭の面に落て、ころ〳〵と風の後にころがりゆくのを見ると、秋もやゝ末つ方になつたるらしい。

奥坐敷の一間は、此家の納戸と見え、明竹の叢に隠れて、切り拔いたる圓窓が見える、その圓窓が半分開ひて、内に鬢のほつれ毛を拂ふ女の顔、――あつらへ向の思案顔が見えて居る。風の吹くたんびに、明竹はその老ひたる梢の笹を搖り立てゝ、室の主を驚かして居る、室の主は此家の妻君であるので、針仕事の最中である。年のほどは三十二三とも覺しく、色香は何處にか殘つてあるが、何さま肉落ち頬骨出でゝ、氣の毒な思案顔である。

妻君は二三度髪の油氣に針をしめし、指差を差しなほして、頻りに針の手を急いで居る樣に見えてたが、漸う尺ばかり縫ふかと見る間に、又次第に緩が來て、やがて仕事を下に置き、眼に轉がる涙を眶に落してすゝりあげ、しみ〳〵と獨語を始めた。丁度堪へがたき胸の苦を、隠れたるに見玉ふ神に訴ふるかの如く。

『どふ考へても、去るより外に仕方はあるまい。第一旦那の不身持なる事、お母さんは御存知ないから、旦那が

家で塞いで居なさると、何だか私が御氣に入らぬ事でも、仕向けた樣に思ひなすつて、此日頃の當り障りの辛さと云つたら、云ふに云はれぬ程であるのに、旦那は旦那で、内の事はお搆ひなしで、外にばかり猥泊りなすつて、偶々家にお歸りなさるれば、放蕩がさせた借金に責められ、塞いでばかりお出なさるし。見るに見かねて、心から慰めようとすると、何か尋ね立てする樣に邪推されて、頭から嚙つく樣に叱らるゝ、これで那して身躰がつゞかう。

と又一雫ふり落して、

『虚か眞か知らねど、風説では、あの圍ひものまでが、種々旦那を唆かして、私を離させうとすると云ふ事、嫉妬ぢやないが腹立たしい。素性も知らぬ茶屋女でも、旦那の思ひものと思へばこそ、默つて見て居るものを、その恩を仇に返さふと云ふ其口が引裂きたい。その口につく旦那の心が怨めしい。離れとならば離れも仕よふ。私しは離られても搆は仕ないが、正妻を追ひ出して、茶屋女を引入れたとあつては、人の上に立つて、村長ともあがめらるゝ、男の大事な顔が潰れませふ。

『からと云つて、此間お諫め申たる時にも「女の嫉妬ほど聞きにくいものはない」と、すげもなく打ち返されて、其からと云ふものは、あてつけの樣に御歸り遊ばさず。それを又あのお母さんが、何にも御存知ないくせに、兎角お金が愛憎がないから、あれが氣が反れるのだ。あしき嫁ゆゑ、大事な息子を棒にふるとのお腹立、まあ何と云ふ身の不運であらふか、それでも矢はり夫は可憐しく、子は可愛く、去りたくは微塵もなけれど、どふせ今に去らるゝだろふよ』。

と懐に手をさし入れて、怨の數々盡きぬ折柄、忰の太郎が勇ましく學校から歸つて參つて、母の前へ手をつく〳〵、

『お母さん只今』

『おゝ早かつたねへ、そして今日のお清書は』
『お母さん、何をぼけてるの、お清書は明日だよ、今日ちやありやあしないよ。』
『そうだつけ』
『あのねへお母さん、今日學校で吉さんに聞くとねへ、それはどふもそれは、あの雜木山にねへ、松蕈だの、初蕈だの、千本しめぢだの、針蕈だのね、それはどふも大變だつてね、どふも〱澤山だつてよ。お母さん、人の往かない內、今から一處に蕈狩に往きませふ。お母さん。行かふつたら。なぜ、かまひしなひ、行つて、おゝうれしい〱。

＊　＊　＊　＊　＊

鳶は小く秋の空を舞つて居る。秋の空は高く雜木山の梢を離れて澄でる。山は深綠で、空は眞青で、昔ては紛はしかりし眺も、今は判然と分れて居る。その深綠の雜木の間に、蔦や楓の紅葉する時が、折よく蕈狩の時候であるので、村內の若き男女が、『麓の紅葉が姉女の湯巻か、姉女の湯巻が麓の紅葉か』と、例年の樣にきのふもけふも罵り出づる。

山も岩木でないと見えて、菝葜だの、棘樹だの、伐株だのと、姉女達の赤い唐縮緬の湯巻を捕へて引ぱり、時宜によつたら、引裂きかねまじき勢に、姉女達は辟易するので、蕈は其奥にあつて、こゝですと云はぬばかりに待つて居るに、蕈狩はそこをよけて通るのである、それもその理なので、若き姉女達は、蕈狩はどふでも可、家庭は彼等の爲に窮窟である。その窮窟を一年に二三回も脱け出で、友達同士で、天下晴れて男の噂をするのが樂なので、それが蕈狩の目的であるから。

今しも峰つたひに、數々續てある、丈の高ひ薄が、ゆら〱搖いて、其間からちらりと俯向たる丸髷が見えた。やがて太や〱と鋭い聲が耳に立つよと思ふ程な

く、次第に低くなりゆく薄と、溪際の灌木と往き合ふ處で、青葉なしに、二つの人影が目についた。勿論、先の村長の妻君と、其の一子太郎である、妻君は内に鬱いで考へ事をせふより、外に出たらば氣も晴れよふかと云ふ理由で、蕈狩に來たのである。

『お母さんは目くらだよ、御覽、僕は此樣なに澤山採つたよ。』

『ほんとに爾だ』

と何だか氣のない、つまらない、分らない返辭であつた。太郎は聞き咎めて。

『お母さん、今日はどふか爲たんですか』

子どもにまでも氣づかれたかと、識らず知らず吐息をついた。

『お母さんはどふも爲ないの。』

『でも氣分でも惡いの。』

『なあに秋のお風が吹からよ。』

『おや、秋のお風がいけないの、秋のお風が吹くんで、僕は大變に面白くてよ。お母さん御覽、お風が吹くから、茅の穗が躍つて居まさあね、あれ御覽な、あら、あら、あんなる獨て躍つてねへ』。



母親は、絶へず風に吹かれて、靜まる間と云つては、一分時間だにないのを見て、自身につまされて、無言に眺め入つて居る。

『お母さんつたら、なぜ今日はさふ不活潑だらふねへ、何か考へて居らつしやるの、』

『おかしな事を云ふ子だよ、お母さんが何考ゆるものか

ね、箇樣して芒の躍るのを見て居るではありませんか、お前は精出して蕈をお探しな』

『だつてお母さんがお探しなさらんけりや、僕だつて厭だ』。

『それではお母さんも探しませふ、これ御覧、こゝにこんな大きなのがあるのよ』。

『おいそれは可ないよ、紅蕈ですよ、』

『紅蕈つて』

『お母さんは知らないの。それを食たら死んで仕舞ますよ』。

『おやそふかい』。

と是には母も驚いたと見え、慌しく其紅蕈を投りすてた。が、夫れつきりで母は再び思に沈んだ。

太郎も母の樂しまないので、何だか自分も面白味がなくなつて、蕈を探す勇氣もくつ折れて、悄氣返つて立つて居たが、突然、

『お母さんもふ歸らふ』。

『其樣、其樣しませふ』。

太郎は不平に堪へなんだ、蕈は採りたし、母は同意せず、と云つて一人では面白くないので、すご／＼母の後について、山路をば下りかけた。

谷の方へ下りてくるを、夏の間は草叢に隱れて、ちろ／＼と音のみに流れて居たる溪川も、今は草が倒れ伏して、水落ちて石出でたる溪川の姿、珍らしく顯はれ出で、處々の小い淵には、櫨の紅葉が逆樣に梢を映して、さゞ波に動いて居る樣、得も云はれぬ鮮かさである。

『あれお母、お母、お母さん、鮠が鮠が、』

『どふしたんです。』

とさもうるさゝふに云ふ。

『ま、ま、一寸來て御覧、鮠が瀬を上つて居ますよ、登りきらずに困つて居ますよ。』

『そうかい』。

母親もこれに釣こまれて見えたので、太郎は母の手を引張つて、曳きづつて來た。

しよろ〳〵と水の雫が、岩の角、小石の上を、躍り越へて下る處を、一匹の小鮎が、上の淵に登りつかふと、石の隅、岩の根を潜り〳〵、右になり左になつて、登りかねて居る處。

『お母さん御覧よ、もつと瀬がゆるひと可いにねへ、ほんに鮎はかはいさふです。僕はどふしてやらふかしら。』

『いけない〳〵驚かしては可ない、唯不動として見ておいで』。

『あれあの小石が邪魔だ、あの岩があるからだ、あれを除くれば水がゆるむのだ、あの石を取てやりたいなあ。

――あ、あ、あれ〳〵、登る、登る、あ、あ、登つた、登つた、到底登りついた。やあゑらい、實にゑらい、あゝ實に鮎はゑらいな。そだ、そだ、此間も先生の話にね、司馬温公と云ふ人はね、小い時にね、友達の中で一番記臆のわるくてね、そして勉強と忍耐の力で、友達よりも一番の學者となつたつてよ。だからお母さん、何でも勉強と忍耐が第一だねへお母さん』。

『其樣だねへ』と大きく長き息をついて。『お母さんも、まだそこに心がつかなんだ』

『え、』

『だけどねへ、今日つく〳〵鮎に感したよ』と、又一つ溜息をついた『そして太あや、も一度山に登らふではないか、そしてもちと蕈を採つて來て、お父さんやお祖母さんに煮てあげませふ、あゝそふ仕やふ』。

母の言が意外なので不思議なやらうれしいやら太郎は一丁も先に駈け登つた。

* * * * *

村長の家はうつて變つて改良された。初めに妻君が姑に實々しくなり、姑が嫁に温しくなつた。やがて例の

圍い女が、他の男と駈落したので、村長の目が始めて醒た。夫婦の間が始に返つて、一家が笑顔で滿された。

西洋女房氣質（上）

AB子譯

狹き日本の中にさへ、關東關西、奥州薩摩と所かはれば、女房の品もまたさまぐ＼にかはるもの、廣き世界に乘り出しては、國によりて女房氣質の相違もまた誠に莫大なり。こゝに先づ歐洲女房の標本を一つ二つ擧げ見んに、

・佛蘭西

佛蘭西婦人は生來婚姻學の達人なり。榮華に耽る高貴の淑女も、裏店に詫しく暮す貧女も、佛蘭西婦人と云へば實に愛嬌の塊なること不思議なり。如何程貧窮する者にても、小奇麗にサッぱりとして、怜敏なること類なく、宛ながら蝴蝶の羽たゝく風ありて、一擧一動しなやかに優美ならぬはなし。一寸衣服の褄かゝげて雨あがりの街歩むにも、其優美なること天下に敵なし。佛蘭西婦人は、或はめかすことあり、決して俗な事はなし。年若ひ裁縫女をして貴顯高位の客間に一時間も居らしめば、起居動作言語容止宛ながら高位婦人の生物しなるを見ることあらむ。其觀察力の鋭敏にして、何れの境遇にもすべて適すること右の如し。佛蘭西女房の常に目ざす所は、良人の眼によく見られることなり。一躰分身して、良人の朋友ともなり、腹心ともなり、事業の仲間ともなり、食卓の相手ともなり、また品好き意味に於ての情婦ともなる。佛蘭西女房は常に身じまひを變ふ。三四週間の上も同じ髪の結び様をする者なし。愛と云ひ情と云ふものは、些細の事、一寸した思はくによつて育つを知り、髪に一寸薔薇の花を挿すとか、羽織着かゆるとか、髪の結び樣とか云ふ事は、良人の愛情を養ふに大關係あるを知り、何樣

に旨き物にてもいつも〳〵同じ煮様にては何時かまづくなることを知るなり。

世間には婚姻をすれば詩的の興味盡ると云ふ者あり。愚かなる事なり。佛蘭西婦人などは婚姻後夫婦暮らしの面白味を十分に解し居るなり。殊に英國などにては、興味は結婚前の約婚時代にありて、結婚をすれば直ちに實際生活の事のみにかゝるより從つて興味も盡くれ共、佛蘭西にては之に引易へ、結婚は初にして終にあらず、夫婦相識り相解し相懷くは結婚後の事なり。佛蘭西の四十女何故に斯くは愛嬌多きと云へば、此は其女の常に良人に愛せらるゝ事のあり〳〵と容貌に描かれ居ればなり。佛蘭西の夫婦は互に少しも相識らずして結婚すると英人は云ふことなるか、其は事實なり、英國には十年約婚して猶結婚せぬ者あり。一たび結婚すれば詩的興味何處にあるや。

＊　＊　＊　＊　＊

英　國

英國の社會は、貴族社會、中等社會、勞働社會の三つに分かる。女房氣質も自から三つの別あり。

勞働社會の理想的女房は、所謂世帶女房臺所の頭なり。結婚前は幾年か去る紳士の家に行きて、料理作法何くれと見習ふ。或は料理方、或は小間使或は悉皆下女になりて、また一週間十志の儲け道を知る。十六頃より廿四頃まで是と思ふ男と交際し、然る後結婚す。生きたる子供十人、墓に五人と云ふ位の子持なり。それ〳〵立派に育て上げては、小學校に出し、年頃になれば男の兒は商賣につけ、女の兒は奉公に出し、日曜日には見苦しからず着せて小供を會堂にやる。併し自身行くことは稀なり。行けば大抵夕方にて、其後は夫と打連れて隣家に喋舌に出かけることもあり。良人を信ずること類なし。『内の丈さん程賴もしい男があらうか』とは其常に言ふ所なり。良人はおり〳〵醉ふては

妻をうつ、併しあとで後悔すると云ふ樣な男子なり。土曜日の夕方は、上手に良人にねだり給金の大半を受取る。餘は大抵酒屋のものなり。良人煙草のむも、妻は呟かず。毎日辨當の煖かいのを鑵に入れて子供に持して仕事場に送る。されば斯社會の女房は、一生良人の爲め大勢の子供の爲めに洗濯や料理や裁縫や寢床のあげおろしなどにて暮らすなり。然れど盲目ながらも天道樣を信じて、宗教の儀式をば大切にするなり。斯る女房の斯る境遇に生れ來て一生職分を盡し行く狀を見れば、誰か尊敬して且憐まざらんや。

中等社會の理想的妻君は、今少し上等なり。彼女はよくピアノを彈ず。娘の時は學校に出で、招待狀書く位の學問あり。槪して快活な標致のよき薔薇色の頰したる娘なり。男彼女に逢ふて、之を愛し、約婚す。女の信實貞操なること、一分の隙もなし。彼女は深く郎を愛して、郎を信じ込む事、傍より涙の落つる程なり。

斯くて數年待つて、結婚に差支なき金がたまれば、女は直ちに純乎たる世話女房となる。中等社會の女房の役は、自家の生活をなしたり自個の心力を擴張したりするにはあらで、良人の社交的名代を務むるにあり。然れば儼然として食卓の頭にざし、馬車が手に入れば揚々として乘りて出で、良人の朋友の妻女を訪ひて茶やテンスの案內をなす。子を生む六人、以後は大抵其世話に暇を消す。良人の事業には關係なく、何事も問いもせず。受取つたる賄料を上手に使ひ、其の金のゆるす限り自からも子供も立派の身なりをすることを務むるなり。成る可く家內を立派にし、おり／＼はピアノを彈く。然しあまり小說も讀まねば、詩や文學も同樣にて、科學とか、思想とか、政治とか云ふ事は夢にも見ぬなり。良人の版圖は帳場、妻の領地は客間。此が中等社會のありさまなり。斯くて行く／＼は年も高く軀も大きく息子を取しまり女はそれ／＼しつかり

した人に嫁入らして、まことに質實篤厚花はなけれど實は多き英吉利中等社會老女房の標本となるなり。」

貴族社會には理想なし。此社會の男は色々若き時に亂行して、然る後家持つ爲めに女房持つ。女房は富めるあり、また美なるあり、美にして富める者もあり。貴族社會の女房は交際社會に生活す。良人は良人の行く所に行き、妻は妻の之く所に之く、つまる所行き着く先は離婚裁判所なり。時々は打揃ふて此處に行くことあり。財産それ〴〵形づけて、笑つて互に別るゝなり。然る後又々世の中に流れ出でゝ、同様の事に始む。其理想は自己の快樂にあり。(是れグランド、アルレン氏の話なり)

衆人の奴となる能わざる者は衆人の主となる能わず（トマス、カーライル）

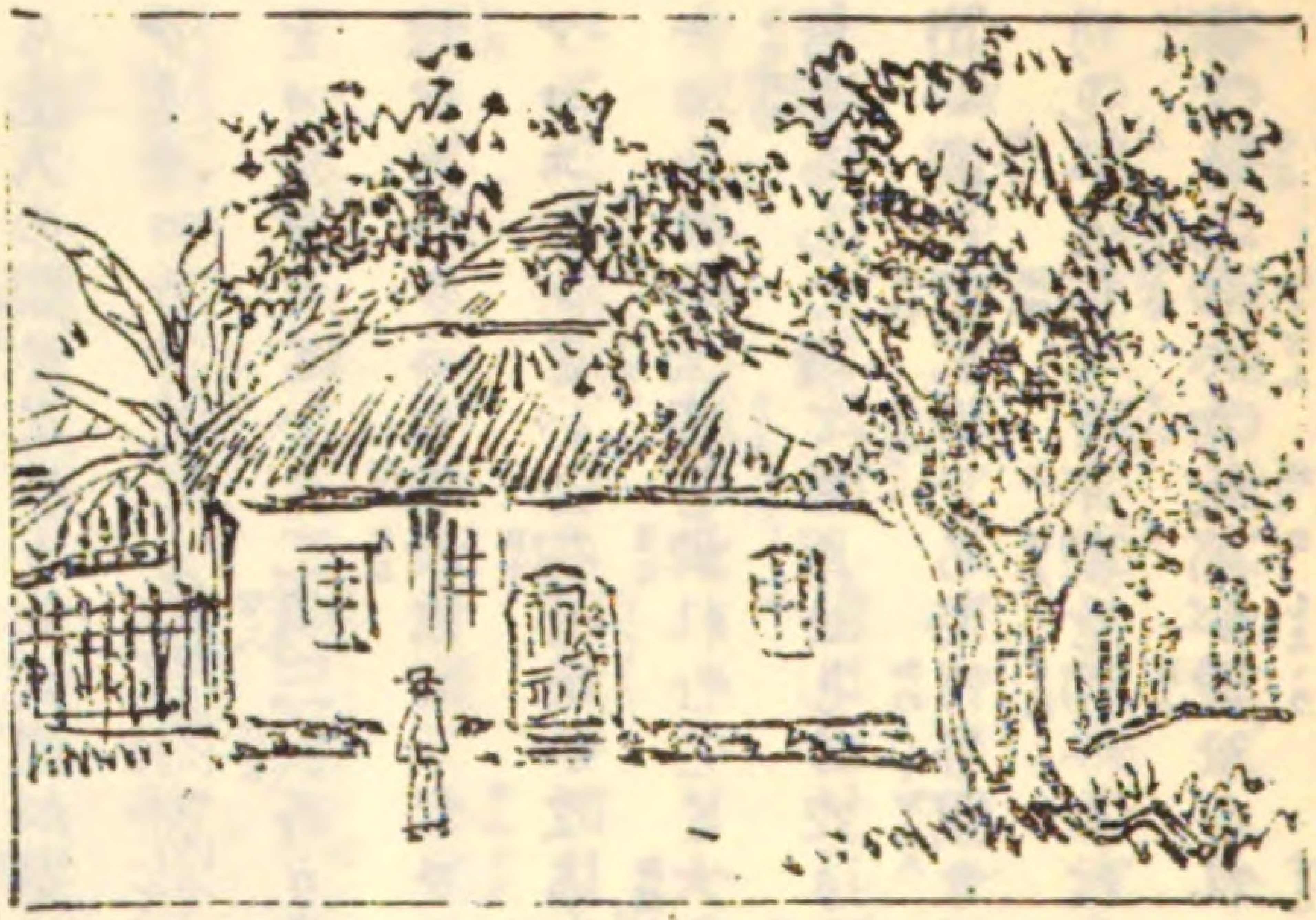
談叢

初太郎の漂流譚(二)

やがて其邊の大樹のもとに牛の皮を二枚しきて七人を一所に臥さしむ夜深くなりて二三人の人何やらん用事ありげに幾度も其邊を行めぐる故すはや殺しに來るならん今にもいかなる憂き目にや逢らんと恐ろしくてしばしもまどろむこと能はず（後に聞けば爰には獸も多く畜置たる故其番をするもの〻夜中に幾たびも見廻りするなりけり）其頃四月中旬なれども日本の七月頃の氣候にて暑氣強く然れ共蚊は至て少し既に其夜も明渡りければ二軒の家より婦人二三人出來り七人の者を迎へて各其家につれ行きコウヒイと云茶のごときものに砂糖を入れたるを一人〳〵に飲しめたり扨三人と四人と二組に引わけて家の内には入れず軒よりさし懸をして萱の如きものにて日覆を造り其下に牛の皮を敷て食事を與

ふ唐黍の餅と鹽漬にしたる獸肉と芭蕉の實なども食はせけり（芭蕉の實は赤く熟したるを食す甚旨きものなり）　此二軒の家居一軒は土藏造りにて壁の厚さ三尺計長さ五間奥行四間高さ一丈計東向に戸口一ヶ所明けて屋根は萱葺なり（萱の形は菖蒲に似て長さ一丈程幅一寸程二十枚計を一把になしたるにて薄く葺り）　家の內は土間にて床の上に更紗木綿の蒲團を敷に臥所とす釜屋を別に建て竈は土にて作り鐵の鍋又は炮烙の如き物にて煮焼す一軒は堀建にして壁をつけ家根は同樣なり兩家合して二十人餘居住す人物は色白く髮黑く眼の色も日本人に同し但土藏造りの內に居る主と覺しきもの一人は西洋同斷の人物なり此處はアメリカ洲ベヽカリホルニヤの內カボサンロカといふ所なり山下の濱邊にて狹き所と見ゆ二軒とも豚鹿羊の類を多く飼ひ置き人家多き所へ商ひ渡世にする躰にて數多圈を設て其中に飼ひ置き此所に二日留りしが其間朝は茶に砂糖をいれて飲み食ては晝と晩と兩度づゝ食す三日目に成りて二百石積計の船に獸肉を脯にしたると豚の油とを積入れ七人の者をも共に乘せて何方へか送るべき躰なり此船小さけれど底は銅にて包み其餘の所も西洋船とかはることなく帆柱は二本建て船子は四人乘なり此船にて東に向ひて走り三日目の巳刻ばかりに一ッの濱邊に着たり此間五十里計もありしと覺ゆ左の方は地續き白濱にて山も連りて見ゆ頓て濱邊へ鞍置馬十二三疋牽來り此所の人物前の所に同じく馬鞍共日本にさして替らず（但鞍は白木にて銀の金物を付たり）　各馬に乘られ口付一人づゝ付添ゆく中には馬の尻に乘られたる者もあり又船頭と覺しきものも同じく附添て北の方へゆく初め二軒家に居たる者の內一人同船にて來りたり是も馬に乘りて何方へか急き行躰なり大方我々が事を役所などへ告行しならんと推量せり扨夫より十七八丁行て人家七八十軒ある所にいたる此所はベヽカリホルニヤの內サンホセといふ所のよし北亞墨利加洲の內メヒコといふ都の支配の地なり突當りの家に行たれば役人躰の人三

入居たる故則馬より下りて會釋をなし側を見れば以前の黒船に殘されし六人の內七太郎萬藏兩人參居たり大に驚く樣子いかにと尋れば兩人答ていふ樣彼船此濱



邊へ水を汲に上りける折から我々をば此濱へ捨て何國ともなく行たる故昨日より此所へ來り養はれ居るなりとて互に別れしよりの始末幷に船中に殘る四人の事共をも咄し合ける內に町人躰の者廿人計來りて九人の者を壹人宛思ひ〳〵に連歸る中にも初太郎壹人殘り居たるを年齢五十歳ばかりに見ゆる人品能人來り連歸らんとするに此家の主人の妻と思しき婦人又は寡婦ともおぼしきか何分我家に留置べしといふ樣子にて右の人と互に暫し爭ひしが遂にかの人無理に初太郎を伴ひて壹丁半程行き其家に至りける此家の躰を見るに長さ五間幅三間計堀建造りにして白壁をつけ屋根は萱葺なり家內は男女十人住す下女二人下男壹人あり家の內は惣て土間にて各壹人宛の臥床を居へ其上に蒲團を敷たり人物初めの所に同く色白く髪黒く男女とも奇麗なる方なり衣服食事も初に同じく唐黍小麥獸肉を糧とす朝起たる時は茶に砂糖を入れたるを飲みパンを食す（パンは小麥の粉を鷄卵にて練りカステイラの如く燒たるものなり）男女とも履をはく男子の沓牛の皮の紬拵を用ゆ底は三枚重ねなり是は暑氣はげしくして砂地燒るゆへ底を厚くするよしなり表は鹿羊の皮を用ゆ此地北極土地二十五度計に當り暑氣盛にして砂の色まで赤黒く燒る程なれば道一丁計にても跣にて行ことは難しかれども日々巳刻頃より涼風南方より吹來るゆへ思ふよりは凌易きよし實に造作の自然

と思はれたる又男女共四五日目には溪川に往て水を浴すいづれも膚を人にみせず女は猶更愼みふかし此所にて初太郎を始め九人の者皆頭髮をも所の風に作り衣服も土人の姿となれり初太郎が寄宿せし家の主の名をミゲリチヨウサといふミゲリは名にてチヨウサは苗字なり名を上につけて云事外國の風俗なり妻の名をイナシヨといふ二男三女あり男子の名はフラス長女はアントウニヤ次女はセンシヂン末女はヘンス幼男をアコステンといふ扨もいかなる因緣にや有けむミゲリチヨウサ初太郎を憐れむこと大方ならず衣服などをも皆新らしく縫て着用せしめたり初め其衣服を着て町へ出一同の者に逢たる時は各驚き羨しとなん善助を連歸りし人も同しく不便を加へあはれみけれども婦人なき家なりしゆへ初太郎が愛せられし程にはなかりしとぞされども兩人は家事諸用等に少しもつかはるゝことなく安樂に暮しける間氣力平生にまさりけり其餘七人は朝は山に入りて薪を採り或は田畠を耕す助けをなし又は水を汲み庭を掃などして日々を送り少しの暇ある時は九人一所に集りて故鄕のことを噺し合の外他事なし扨ミゲリチヨウサはおもふよしあるにや志きりに初太郎にアメリカの語を敎へんといひけれども外國の辭を覺へて何かせんとて一應はいなみしが言語を覺へたらば早々本國へ送り歸すべしとのことゆへせん方なく少しつゝは習ひ覺へけり文字は二十八字橫文字にてくさり樣さま〳〵六かしき故書き覺ること能はず只初太郎といふ名の文字までを書覺へけり家主二日目〳〵に衣服を着替れば初太郎にも同じく着をかへ食事なども家主に替ることなく我行く所へは必伴ひ行かく愛することは其節己が女子をもつて初太郎に妻あはせんと思へるよしなりある時娘と初太郎を一所によせて婚姻の式は



かやう〳〵と欺られしこともありしとなり又折〳〵は家主に伴はれ鐵砲にて兎を打に行しこともあり此所にては北辰も日本よりは餘程低く見へ土人の咄しには日本の晝は此地の夜なりなどゝいへりとは凡カリホルニヤの地双方に海を受け内海の方をばべゝカリホルニヤと云外の方をばアリタカリホルニヤと云其間の打越四十日路ありと云但し道は近けれど山路險地にて人家少き故なるべし城下をメヒコといふ總て土地の廣きに比べては人家至て少し扨寅の四月中旬過各此サンホセに至りてより三十日ヲを歷て善助の家主なる人ラッパスといふ所へ歸るとて（此人はラッパスより役義にてサンホセへ來り居たるが主用にて舊里に歸るよし也ラッパスもカリホルニヤの内也）人馬食物の用意し善助をもつれてラッパスへ歸れり又四五十日を歷て總助伊之助利三郎三人の家主是は皆百姓躰の人にて他所へ稼に行とて各一所に連行て共に働きをれるよしなり初太郎七太郎萬藏彌一郎多吉の五人は皆サンホセに留り居けり夫〻三四十日を過八月上旬に成て家主ミゲリチヨウサ公用ありてマサトランといふ所へ行べきよし城下メヒコより書翰にて申來りしかば急き彼地へ行とて留守は女子供ヲなれば諸事初太郎に托し置き妻子にも其旨を告け船便を求めてサマトランへ越けりサンホセよりマサトランへは外辰の方にあたり四百里もありて入海を隔たり（地球全圖にみへたる東紅海成べし）四百里といふは餘程遠方なれども此國の人はこれほどの海路をは大儀に思はぬ躰にて五日程にて容易に渡海するよしなり夫より以後は初太郎ミゲリチヨウサの妻子とともに留守を大事にいたし暮しける四月中旬過と思ふ頃より十月下旬迄凡二百日ヲもサンホセに居たりける此間雨ふること至て少し六月の内夕立二度聊雷鳴あり八月に一度風雨ありしのみなり



（未完）

ボルネオの風俗

ボルネヲは南洋の島洲なり、今はマレー人種の住む所となり居れど、其以前は「ヂヤーク」といふ人種住り、此人種は野蠻にして、其色マレー人種よりも黒きやうなれど、其皮膚は銅色を爲せり、毛髪は前短に切り、後は脊に垂れ、大なる口は、梹榔子を嚙みて眞黒となりし齒をあらはせり、彼等は殆ど裸躰の生活を爲せども耳と腕と脚には眞鍮の環を嵌め居り、其容貌粗野にして猛烈なれど、マレー人のやうに狡猾なる人相を有せざりき。



而して彼等は「マホメツト」の宗教を奉ずるものにあらず、殆んど無宗教なり、併し或る神を信ずるやうなれど、それとても如何なる神かを知らず、又之を知るの必要なきが如し、神を念ずることもなければ、祈禱を捧ぐることもなし。

彼等は宛然獸類の如く此世界のみを知りて生き居りたれば勿論來世なんどの思想あらず、而して彼等は獸類よりも不幸なること多し。

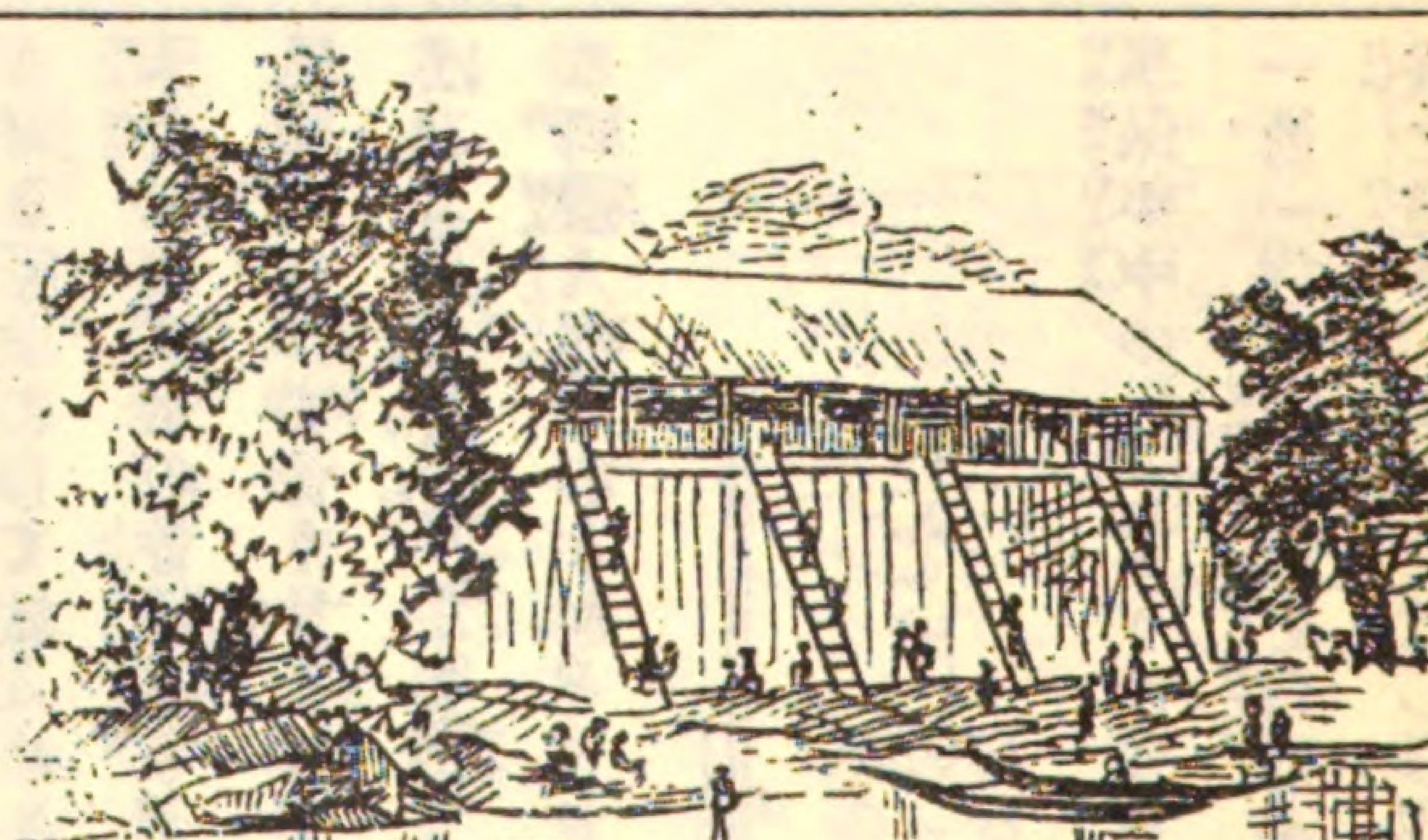
彼等には非常なる罪惡を有せり、其は敵の首を取ることを此上なき快樂としたることとなり「ヂヤーク」の種族數多ありて互に敵の首を取らんとせり、海濱に住する「ヂヤーク」は最も獰惡にして小舟を漕ぎ出し他所に侵入して何物を持ち歸ると言へば奴隷にあらで人の首級なり。



首級を取りたるときは、腦膜を取り出し頭顱は肉と毛髪のつきたるまゝ煙にいぶし、穴を穿ちて糸を通して腰に纏ふを常とす、新しき首級を持ち來りし其夕は一同快樂を以てぐる〳〵と舞ひ踊り、首級を熱視しては叫び、凱歌を擧ぐ、夜中は其首を保ち、人ともなれば首を以て戯れ遊ぶこと、小兒が人形を弄ぶが如く、彼等の蒼白き唇に檳榔子をくはへ、口には食物を含みつゝ彼等仲間のものと話しながら遊び戯る、斯の如くしたる後にて首級は取りたるもの、部屋の天井に吊すなり。

されば首級は家内の最善最美の装飾物にして、成るべく多く持ちしものがえらい人物と定められ、首を取り得ぬものは意氣地なしとて賤めらる、若し同種族より尊敬を受けんと欲する輩は、力の及ぶ限り首級を集めければ、動もすれば些の敵意もなき憐なる漁夫の首を切り去りて歸ることも尠からず。

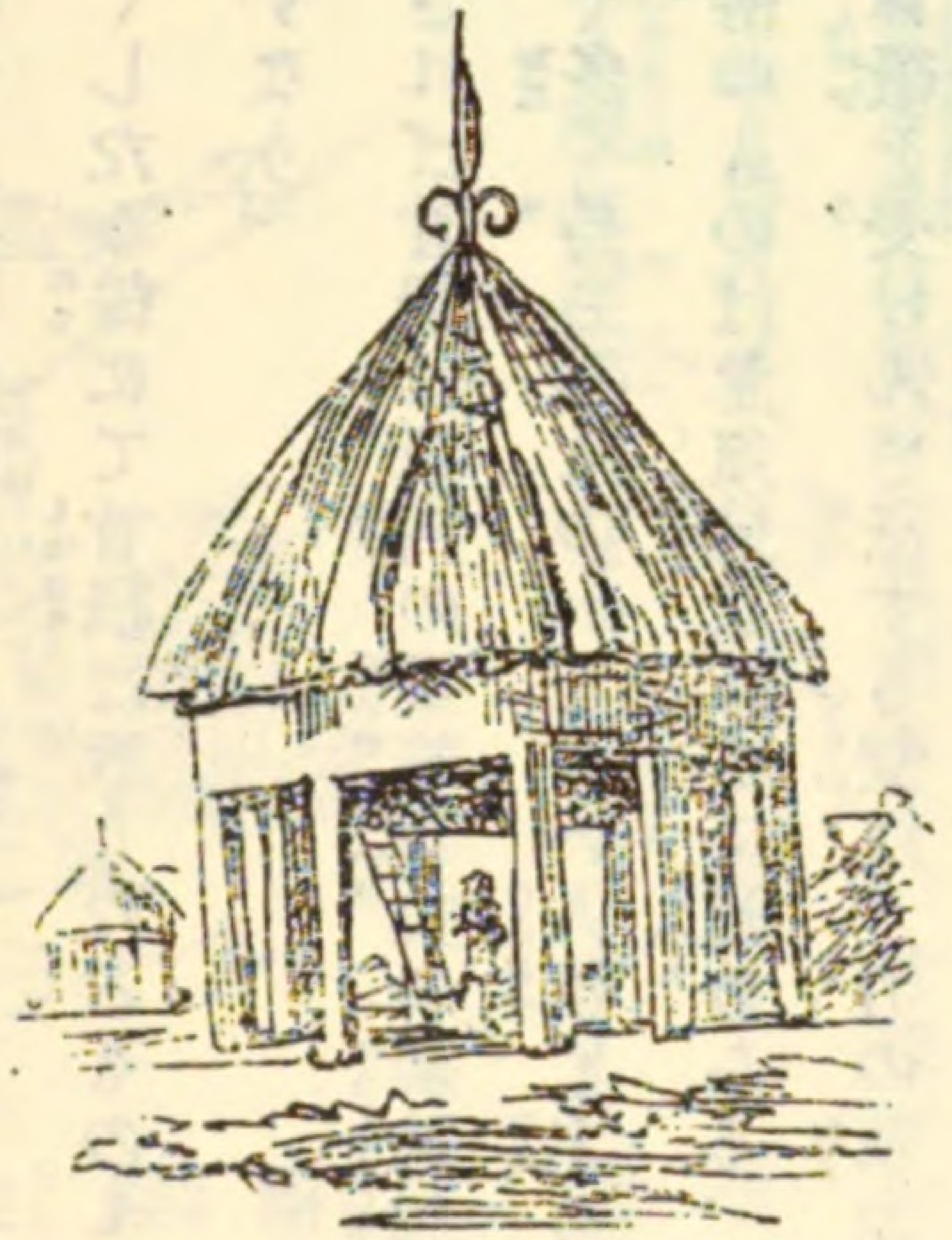
戰爭によりて敵と戰ひ、男子の首を取るは勿論、婦人の首さへ、小兒の首さへ貪れば、赤兒の首も天井にかゝり居ることあり無殘といふも愚なり。



彼等は右の通り首を尊重するがゆゑに火災ある時は、他の家財を燒くとも天井の寶物は失ふを惜む、また自づから首を刎ねて死し、或は父の手にかゝりて死するもあり。

人を殺すことを好めば必らず多くの敵を有するは理の當然なれば、「チャーク」は甚しく敵の襲撃を恐れ、さ

びしき小屋に住む能はず、夜襲を患ひて共同の生活を試む、一軒の家に四百人も住む程なれども、隨て家屋も廣大なり、



安全を圖るため、高き柱の上に造築し、梯子を以て上下す、柱の高さは四十「フヒート」に及ぶもあり、其家屋内には大なる部屋あり、男女混座し、會話又は日々の仕事を爲す、女子は米を舂き、蓆を織り、男子は槍を製し、小兒は遊戯し、室内は常に囂々喧々たり。

長き室の一側には多くの戸を設け、其戸を入れば少さき部屋幾所もあり、此所に家族居り爺嫗や、赤兒や、少女眠れど、少年の寢ぬ所は例の大なる室なり。

丘に住む「チャーク」の家は海濱に住むものより大ならず、而して村落の中央に一家を建て、小兒の寢ぬる所とし、また凡ての首級を保存する所と爲す、家は丸形にして柱の上に置かれ、入口は床の下にあり、こは最も好き家屋にして旅人がこゝに宿泊することある時、天井に四五十の首級連り、屋根の小窓より吹き入るゝ風に搖られて首と首とがザワ〱と當り合ふ音を聞かば、さぞや氣味惡かるべし、我臺灣に近き南洋にはかゝる野蠻人種もありき。

心を用ゆること周到

享保年中のことなりけり。その頃名高かりし觀世大夫、一世一代の觀進能を行はんとて、京都鴨川の河原に舞臺を造り、棧敷をこしらへて興行するに、見るもの堵の如く朝まだきよりつとひきにけり。その二日目の事

なりしが觀世木賊を舞ふ。衣袂飄々扇影婆娑として面白きこと限りなく、人皆感に堪へず。時に群集中田舍ものらしき者拾人ばかり連立て見物してありしが、何かひそ〳〵さゝやき合て一向感じあへぬ樣子なるを觀世舞ながら、はやくもこれに目をつけぬ。さて舞終りて樂屋に入りたる後木戶へ人を遣はし、かく〳〵の田舍もの十人ばかり歸らんとき必ず留め置くべし、ちと尋ねたき事もあればといひやり置けり。程なく數番の能もすみて人々われ先にと歸り行くに彼の田舍者も共に木戶を出んとするをさし留められ、驚くこと大方ならず。如何なることのあるならんと安き心もなかりしが、觀世これを樂屋にひいていへる樣。けふそれがし木賊を舞ふに自分ながらもよく仕たりと思ひし程なれば人々の感歎すること一方ならずと見えたる中に御身たちはさもあらざる樣子にて何か囁合ひゐたるは如何なる仔細のある事にや、そをきかんとて、わざ〳〵留



めしなり。それがしの藝に至らぬ所あらば遠慮なく云はれよと、あるに田舍者始めて心を安じながらも、尙おづ〳〵として言出けるは、我輩は信州その原と申所のものにして木賊刈を業とし居るものなり。近き比京洛見物に來り、今日はからずも能興行あるをきゝ及び、一たびは見物して一生の語り草にもなさんと思ひ今朝より參りて見物せり、何がさて當時高名の御身の舞なれば心なき我等にも面白くほと〳〵感心せり。さりながら木賊を舞ひ給ひしとき『いで〳〵木賊苅らふよ』といへる所にて鎌の手違ひたれば、さては都にてはかくして苅ることもあらんかと我々はなしあひたるまでのことなりと、觀世聞てそは面白き所に氣付たり、御身等はいかにして苅るやと問ふ。されば木賊は向へ一刀

切に苅るものなるに君は同じ刀にて前の方へ二度まで切られたり、われにては木賊は苅れずといふに、觀世はたと膝を打ち人はその道によりて賢しとかやわれ洵に木賊苅を見たることなきより、さる誤りもありしならめと、大に喜び。木賊苅には厚く禮して物などみせてかへしたり、其後江戸にて木賊を舞ひしときはその言の如くなせりとぞ。

北極大探險家

北極探險を以て有名なる米國のピーリー中尉は同行幾名と共に二年越し北極探險の爲めグリーンランドに在りて久しく杳として消息なかりしがいよ／＼去九月廿一日を以て同中尉救助の爲め赴きたる滊船カイト號に打乘りてニウフオンドランドに到着せり同中尉は此春グリーンランドを横斷して去千八百九十二年の遠征最北點たるインデペンデンス灣に着せしが食物の欠乏人數の欠乏の爲に進むを得ず非常の困難を經てやう／＼歸り來れり是より先きピーリー中尉は前回來りし節北進の道に沿ふて處々糧食を貯蓄し置き進行の便に供する筈なりしが着して見れば前古未曾有の大雪にて其痕跡全く埋沒し百搜千索の後漸く一ヶ所を探し出したるもかねて同所に貯へ置きたるビスケット、牛乳、豌豆汁の罐、肉膏、アルコール等一噸半の食料は悉皆消失し居りて一行は宛ながら砂漠の島に流れつきたる破船水夫の如くなりしが豪膽のピーリー中尉は頓着せず昨年十月を以て更に北進の糧食の貯蓄にかゝり人間の食糧には麋の生肉を以て肉膏に代へ犬の食料には海馬の肉を貯へ石油を以てアルコールに代へ豌豆羹は非常に有用なるものなるも之に代ふ可きものなしビスケットの罐少々殘りしのみなれば更に船のビスケットをもつて之に代へ冬の間は麋獵、海馬狩、橇のつくろひ、橇

食の内地運搬等に暮せり太陽は十月二十三日に沒して二月十七日に出でたり

偖ピーリー中尉は同行三名エスキモー人六名及犬六十三疋を帥ゐて四月一日グリーンランドのバウデン、ロ


北極探撿者ピーリー中尉

ツチを立つて北進の路に上りぬ初め一百哩の間はエスキモー人も一行を扶助し行く〳〵途上に糧食屯所の其一を發見し鑵詰ビスケット少し殘り居たるを見出したり更に進むこと六日にして曾て夥しく肉畜を貯へ置きし場所の近傍に着せしが惜む可し大雪に埋められて所在を失し且エスキモー人も此所より別れて南に歸りしが三個の探撿者は一直線に北極を指して進み行けり第二週の終に到り一行は已に發足點より二百哩進んで海上七千呎の高きに達せり暴風烈しく吹き寒暖計は零點下三十度乃至四十五度にも及びしが一行は大膽にも此寒を冒して更に一週の間に一百哩進みたり第四週に到り勞苦困乏甚しき爲め數頭の犬斃死し餘儀なく荷物を減じ分ちて更に一百二十二哩進みぬ此時一行は已に海面上八千呎の高に達し空氣稀薄にして呼吸甚だ困難を感じ鼻血流出するに到り人も犬も食物とては石の如く冰り固まりし生肉のみ偖第五百哩にかゝりし時橇の走底破損して修繕す可からず六十三疋の犬の中殘たる者僅に十一疋なりしが此れより不用のものとなれり依て相談の後一行の中リー氏を殘し置きて犬と糧食を保管せしめピーリー中尉はヘンソン氏と共に四日の糧と

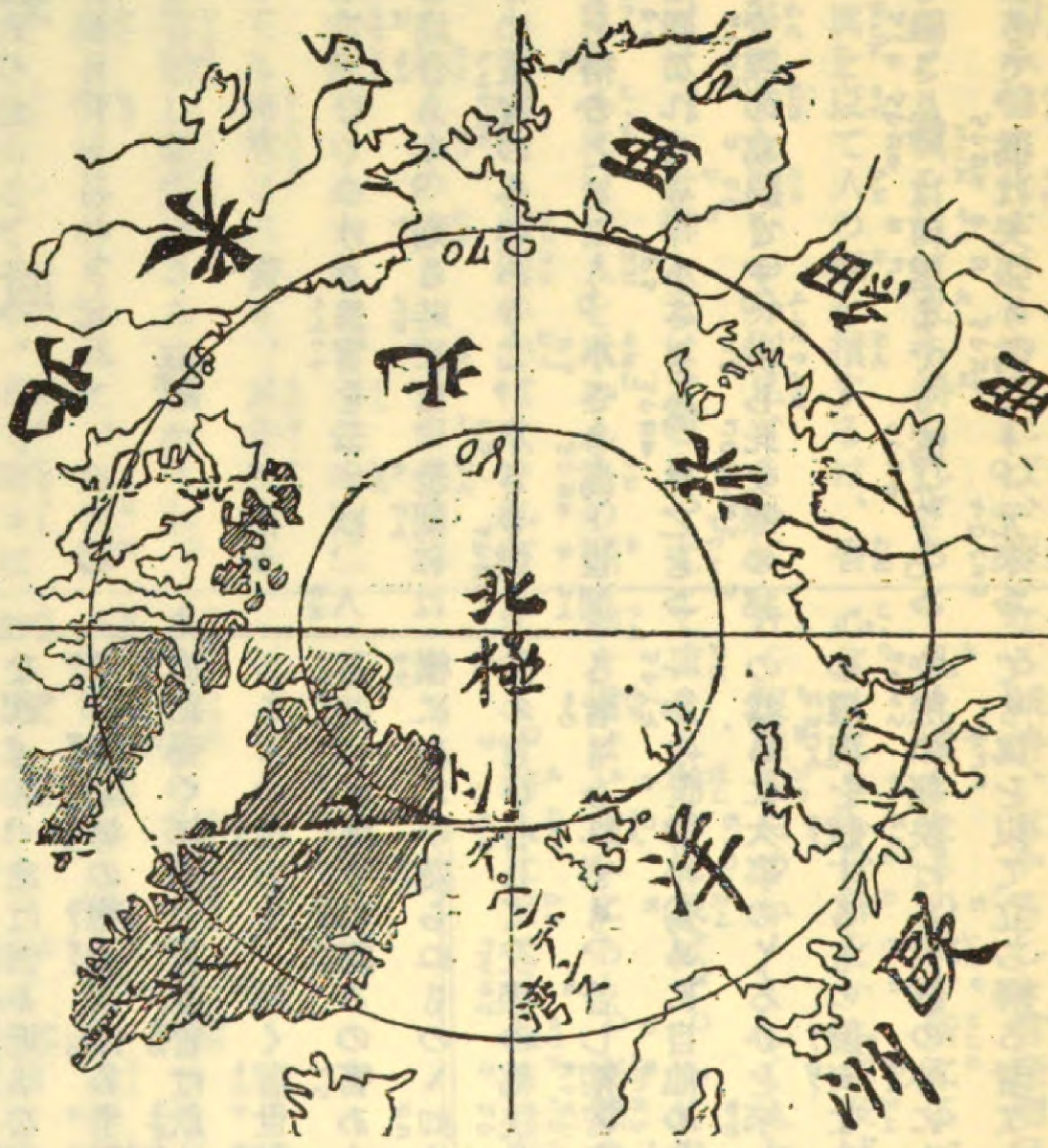
小さき橇一個をもつて一日程には遠き海岸へ向け進みたり同中尉は麝牛を獲て糧食を増さんと欲したるなり然るに二日が間は非常の雪あらしにてやう／＼二人は目指す場所に達せしも更に麝牛を見出す能はず困憊のあまり二人は雪にうたれながら岩上に困臥し辛うじてリー氏が數頭の餓犬と共に二人を待ち暮したる場所に歸りつきぬ

今や貯ふる所は海馬の肉一百封度のみ然れば最早歸らんかとの問題も起りけるが一行は猶も運よくば麝牛を見出すこともあるべければ肉の幾分を犬に與へつゝ前進する事に決し大膽にも進んで低地に下り此處に二日が間あらしに吹き籠められしがやう／＼あらしも已みてイザ進發と云ふ時に到りしに海岸の旅行困難言語に絶したり一日たま／＼兎を射とめたれば一行坐して瞬くひまに之を食ひ盡しぬ程なく一行は麝牛の群に逢いて大小十頭を殺しゝが其後は最早影も見えざりし斯くてピーリー中尉の一行は嶮巖亂礁を越えてインデペンデンス灣（是れ千八百九十二年ピーリー中尉が達したる最北の點なり）に向つて進み四日にして疲れ果てゝ同灣の懸崖巉々たる濱に達したり此時は齎らし來りし油の殘るもの僅に一罐（一升五合餘）なりし

一行已にインデペンデンス灣に達したるも最早一歩も進み難く再び麝牛を搜索したるも影だになければ恨を呑んで南歸する事に決せり此時橇は已に破れ盡し是非なく歸途の用に殘せし一對のスキを以て小橇を作り而して食糧とては麝牛の肉等にて十六日の糧をあますのみ一行は千辛萬苦を經て六月二十五日出發點のベゥデン、ロッヂに達したり進行四十三日にして歸途二十五日なり歸途出發地を距る二十一哩の所にて食物は全く盡きたり出發の當時從へ行きし四十九頭の犬の中生きて歸りし者は唯一頭なりし斯くてピーリー中尉救助の爲赴きたるカイト號が七月三十一日到着したる時は中

尉等三人は困憊して病臥し居たるが漸くにして快復せり。

ピーリー中尉が北極探撿を試むること三回其働きはグリーンランドの北岸を探測して同地は限りなく北極に達する様に思ひなしたる臆説を破りしにあり今や第三回の企今回も失敗したるも氏はホエール瀬の圖を作り更に高地エスキモー人の觀察を十分に遂げ且一年間北極近傍一年間



の氣象報告を持ち來り救助隊もまた北洋附近の植木數の夥しき標本ピーリー中尉の世界無比の美なるものと云ひし純鐵の隕石二箇を持ち來り同隊と共に行きしシカゴ大學のサリスベリー教授も北緯六十四度より七十八度四十五分間のグリーンランドの地質並に米岸の地質を研究し幾多氷河の運動を觀察し幾多の結果を齎らし歸れり

此頃の垣のゆひ目や　初時雨

家政

世辭

黄花

人と交際するに當りて、むくつけく眞實を云へば、人の氣を損する樣なる場合あり。斯る時には、世間にはお世辭といふことに重寶のものありて、小さき僞を以て人の耳を喜ばすを得ることとなり。小さき僞！世間にては、大きな僞は罪なれども、小さき僞は之をお世辭と稱へて、却て交際の秘訣とす。併し此交際の秘訣は考ものなり。

小さき僞！小さしど雖さ僞は何處までも僞なり。お世辭と改名したればとて、僞は矢張り僞なり。元來お世辭と云ふものは、風より淡きものにて、言ふものは加算していひ、聞くものは減算して聞けば、加減して殘る所無一物、唯先方の氣を損ぜぬ丈が得の樣なるものなれども、此は極々近眼な話なり。虛僞、不親切、輕薄、欺騙等の惡德は此お世辭の中に籠るなり。聞く者眞に受くれば、言ふ者は欺くの罪あり、聞く者は惑はさるゝの損あり。聞く者世辭として之を受くれば、彼是共に相僞り相謀るの害あり。世には世辭を以て煙の樣にあとの殘らぬものゝ如く思ひ、言ひつ言はれつ虛僞の言ひ合して交際の秘訣を得たるものゝ如く得々たる者もあれども、若し精密なる心理的調査をなさば、一片の世辭の爲めに自他の身上を誤まり、一片の世辭の爲めに大事のくるひを來し、一片の世辭の爲めに人の靈魂を賊するもの幾何なるや知る可からず。

交際の秘訣はお世辭の外にあり。人は如何なる場合にても眞を以て立ち得る者なり。其は何ぞと云ふに、赤心、分別、及び自然に微妙なる言語動作是なり。すべての事は、其人と其樣にあり。内に赤心滿ちて親切質

朴の風外にあらはれ、言語動作誠實の發現たらば、人に向つて君は盜賊也ともいひ得べく、腹切れともいひ得べし。人心本來善を好み德に化するものなれば、假令お世辭の世の中に立つとも眞を以て立ち得られざる道理なし。然らずして眞を以て人の氣を損するは、吾に赤心の足らざるか、吾に時を擇むの分別足ざるかによるものなり。小兒などは、お世辭を云はざるも、尤もよく人に交はる。小兒の心には、人を欺かん人の機嫌を取らん人をなぶらんなどいふ差別の念はなければいやみもなく、風の吹く如く水の流るゝ如く自然なればなり。記者の友に某女史といふ人あり。年は未だ二十歳に滿たず、學才とても尋常なれども、其學校にあるや一人として女史を尊敬し親愛せざるはなかりし。此人如何なる交際の秘訣を有せしかと云ふに、お世辭と云ふものを未だ曾て言ひたることなく、却て時々は人の氣分をも損じる樣なる裸躰の眞實をいひたり。然るに斯くいはるゝ者、怒るは愚か却て涙を流して喜ぶ者すらありき。これ全く此女史の親切なる赤心、質朴なる誠情、其やさしき言語眉目動作を通して水晶の如く見え透きたるの致す所なるべし。

心にもなきお世辭をいふに及ばず、さればとてむくつけく沒義道につか〳〵しく人を怒らす樣なる言を言ひて直きに誇るに及ばず。おとなしく眞直に、柔らかに剛き道は、確かにあり。交際の秘訣は、此心と此加減にあり。婦人に於ては最も此點に注意せざる可らず。

老人　　仝

左り團扇の樂隱居など唱へて、餘裕ある家にては、老人を家の事には關係なき眞の遊人として置くを孝行の如く思ふ者あり。此は大きなる心得違といふ可し。故語にも其躰を養ふは其氣を養ふに若かずといひて、孝

行の極意は此處にあり。

望は人の生命なり。一家の老人たる者、全く家事以外にたちてのけ物の如くせらるゝ時は、己は老いたり、己の時代は最早過ぎたり、己の花は已に散りたり、己は家にありて最早無用のものなり、など思ひて氣はゆるみ、心は鬱し、張合もぬければ、望もなく、樂もなく、急に年寄るは自然の事なり。斯れば病氣も起り、不平も起り、それに伴ふ家庭の不快も起り、先から先へと及ぶところまことに少からず。斯に到れば、樂隱居は不樂隱居にて、折角の孝行は不孝となるなり。

老人は家庭の眞中に立たしむべし。片隅にのけものにす可からず。家庭は一の地球なり、早きはありおそきはあるとも。處として動かざる所なき樣ならざる可からず。主人主婦たる者は老人の嗜好を察して其心身の益になる事は務めて之を奬勸するのみならず、また自から色々適當なる事を發見して老人に與へざる可からず。男なれば庭園花樹の監督とか、書畫掛物の保管とか、女なれば、室内の粧飾とか、子供朝々の教訓とか、其人に應じ、年に應じ、嗜好に應じ、技倆に應じ、相當の仕事を與へざる可からず。職分を盡すと云ふ事程、身のはげみとなるものはなく、自ら老いたりと思ふ程眞に人を老いしむるはなし。老人に職分あるは、家風を引立つるのみならず、老人其者の氣を引立て、望を擡げ、多年盡したる一家の爲めに今猶盡すの愉快と誇を有せしめ、從て心と共に其身躰を健やかにし、壽命を延ばす譯なり。名醫の實驗談にも、人の筋力は使用するに永續して用ひざるに早く朽つると云へり。此は實に老人の躰を養ひ併せて氣を養ふものなり。

然らずば縱令金屏風にかこい、縮緬の二重坐蒲團に埋もらせ、毎日玉露の池に嗽ぎて、ソップの風呂に入らしむるも「犬馬に到るまで皆よく養ふことあり」是れ老人を犬馬の如く待つなり、假令其の心はなくとも。

尊敬は敬して遠くるにあらず、親愛は肉躰の謂にあらず。
如何に一家の榮なる老人を待たん乎、如何に其殘年を樂しく淸く高尙に過ごさす可き乎、此は主人殊に常に老人と共にある主婦の深く考ふ可き所なり。

癖のいろ〳〵　仝

無くて七癖と諺にも云ふ通り、癖は誠に多きもの、わけても娘の時代などは此癖の多きものあり。一つ二つ注意の爲めに取り出して云へば、
(一)多言。此は說明する迄もなし。雀と云はれぬ樣注意したまへかし。
(二)無言。此は前と裏腹ながら、やはりつゝきなり。言はでもの時には雀も其ちのけにて、言ふべき時は唖となること、注意す可し。
(三)不行儀不作法。客來の時など、母上の顏をしかめさす樣の事、謹む可し。或は母上が、花ちやんや、此お鉢を戸棚にしまつておくれ。など仰しやる時、無言にて芋虫の樣にぶりつとふくれ、罪もない障子をぐわたりとしめる杯の事ある可からず。斯る時には部屋に行きて、鏡を見玉ふ可し。吾顏の愛らしきや否やを。
(四)無禮不遜。尊敬は父母に限らず。近頃の娘方はやゝもすれば老人を嘲笑する癖あり。老人を嘲笑したりとて、己が身分をあげるにあらず。謙遜は人の別して女の美德といふ事を忘れ玉ふな。
(五)法外。此には色々あり。金使の法外なること。言葉の法外なること。此は物事の話をするに、眞實に倍かけて話す事にて、坐興にはなれど、信用をおとし、人品を賤しくするものなり。
(六)無分別。此が餘程あぶなきものなり。分別盛といふ四十にはまだ中々間があるとも、其迄とても片時も

分別なくてはかなはぬ事なり。

(七)嫉妬。此は女の大敵なり。娘の頃にては、誰某は標致が好い、妬ましひ、誰某は友染の振袖をもつて居る、妬ましい、誰某は學校で一番、妬ましい、ピアノが上手、妬ましい、など丶此敵は始終襲ふて來るものなり。人品をさげ、人の心をにがくし、言語擧動を卑劣にし、募り〳〵ては身の破滅、家の名をれ、人の大害ともなるものなり。深く恐るべきものなり。

其外擧ぐれば猶數多ある可し。癖は雜草なり、捨おけば立派の花木もおほひかくす。はやく根ほりはほり拔き去ること大切なり。

内職案内

◎笛の内職は手間賃の貴き方なり取扱ふは重に、日本橋區馬喰町の山田屋、田島屋、小林などなり又賣込人と云ひて内職する家々を廻つて集めるは淺草區平右衛門町の加藤惣兵衛、同區藏前の比志田三四郎、小池何某等なり、此の内職人は、本所相生町、綠町、北二葉町等に多し

●花笛、(長さ五寸位裏に穴三つあり、表に切かけ穴ある笛)、其の穴三つを穿ち、切りかけを作る仕事なり、手間賃、千本に付八錢位、達者になれば千五百本は一日に出來る

●笛に上塗、千本に付三錢五厘、三千五百本位は手早くすれば一日に出來る

●笛に鳴きを付る、千本に付十錢、少しく夜業をすれば千五百本は出來る

●是等の笛は自分資本にして拵へれば、千本に付九十錢には問屋に卸賣が出來る

◎紙製ハンカチーフは重に横濱行きに好き輸出品なるも亦府下の西洋料理店に需用ありて好景氣なり此の内職は左の如し

●百枚の白紙に種々の繪具にて摸樣を付ける賃金六錢より十錢迄なり(但し繪具は自分持)普通の者にて平均八錢位が一日の手間賃なるべし

右の内職は下谷區南稻荷町萬年町山伏町竹町等の貧民の婦女子が最上等の内職なるが外の場末にても盛んに行はる

◎紙屑拾ひ分けの内職は舊來よりあり來りし業にて最も下等社會の老女のすることなれども其の賃金は左の如し

●一貫目に付き金一錢六厘ボロは終日に付六錢より十錢迄自宅に道具を備へ織物を分けるは十五錢より三十錢位まで

此の紙屑より分けは普通の達者にて終日五貫目賃金八錢位が上等なり不熟練者は二貫目が精々なり襤褸は其の品物の種類に依て賃金に相違あり最上等十錢位織物自宅持ち戻りのは素人には些少しく出來兼ねるよりその内職するは至つて稀なり賃金は中々に克く取れる仕事なれども非常に穢き業と云ふべし山伏町萬年町南八丁堀木挽町等の貧民のある邊にあり問屋は數多あり之れに就きて依賴すべし

◎書翰袋此の内職は上等の分にて近頃は中々に景氣克く内職よりは本職同樣にするが多し

●千枚張り賃金四錢より十錢迄

大躰の人は達者に十二三錢は取るも普通内職の人は五六錢位なるべし此内職者は各區に多し

社交一斑

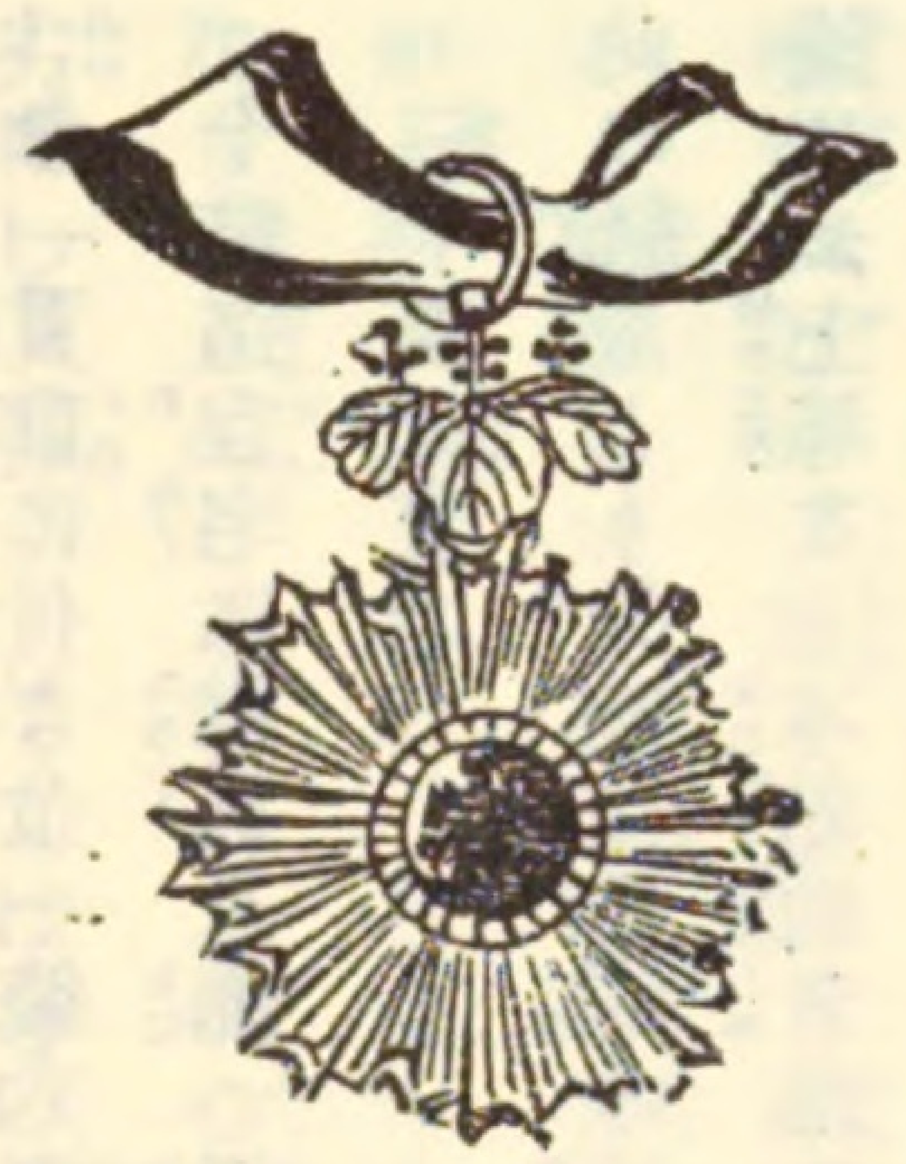
流行の栞

春夢

◉流行の小袖

◎男物(第一)諸糸織の上着に一樂織二枚下着を重ね綿を薄く入れて身巾を廣く仕立し風は紳士社會に需用者多し其柄は鼠の大明萬筋、

稀色地のみとん、薩摩筋、鼠地はけめ、さゞさ、等にして下着二枚は何れも通しに仕立置きて二枚重ねさして着せらるゝ樣にして緩急の用に應ずるもの多し

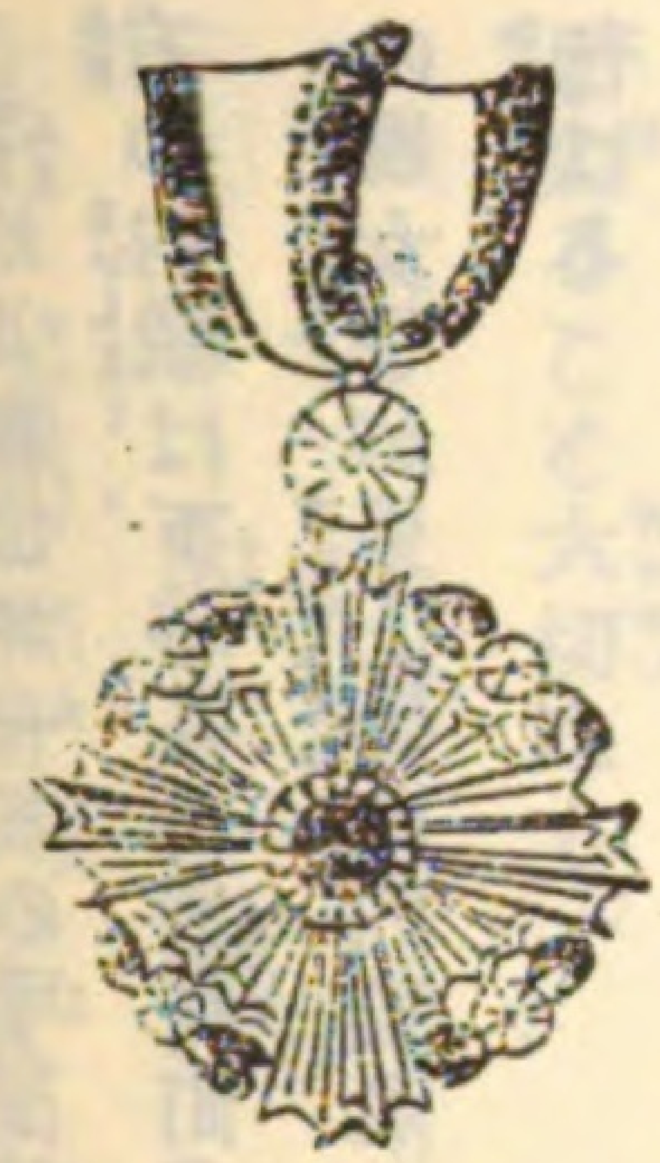


旭日桐花大綬章

(第二)矢張諸糸を上着にして一樂風通織の二枚下着さするもの多き樣見受けらる、尤も此の下着の仕立方は前記の如く通しにせず胴抜き仕立にする方よかるべく其胴に用ゆる品は第一綆紗奉玉第二綆紗縮緬第三綆紗七子等さす、

(第三)一樂織の上着に御召の紋織の通し二枚下着を重ねて着するもの多き樣なり、

(第四)上着をつなぎ糸織にして下着を小紋形の七子二枚下着を合せて着するもの俗に云ふ意氣さやらの好みにて隨分奇を衒ふ人物に多き樣見受けらる、



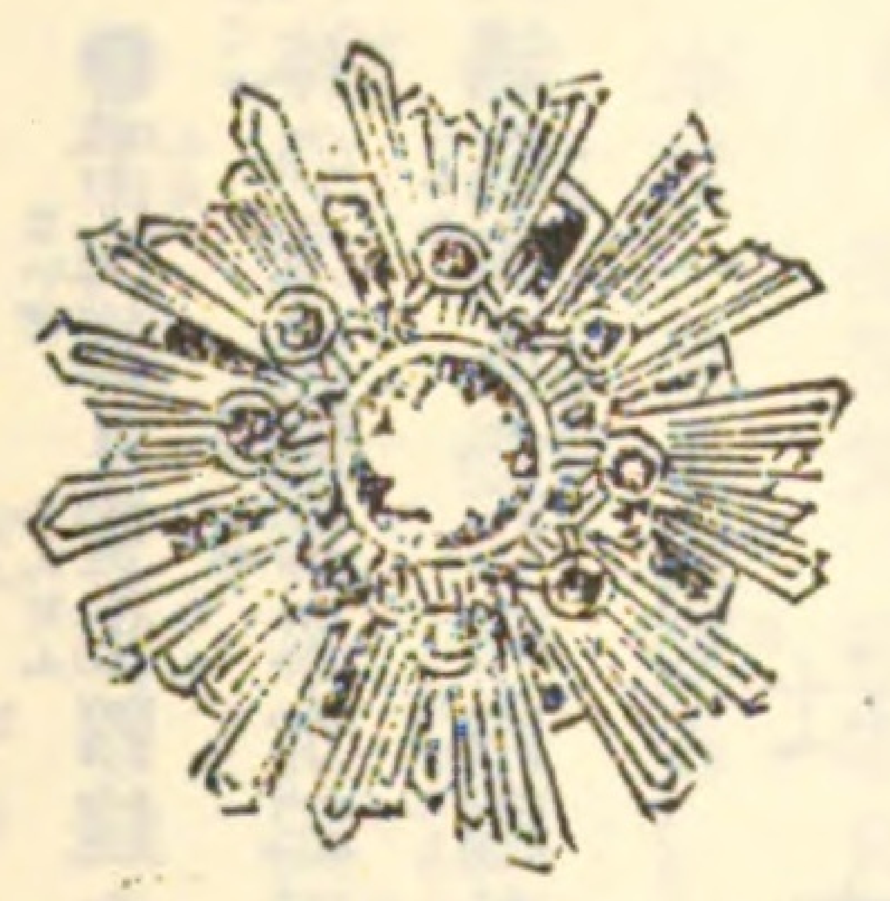
大勳位菊花大綬章

(第五)結城紬の上着に大島紬花絣の二枚下着さし裏を中花色絹さして着する人又多き樣なり是は隨分澁き好みさ云ふべし、

(第六)餘りに見受ざるも一寸目に付くこしらへは三枚又は二枚重ねの結城紬の紺十の字絣の薄綿入なり是は紺地の絣なれば一重もの專用の品なれど何でも着果し上の好さ云ふべし、

其他は節糸織、銘仙、秩父縞等なれど特に案内するに及ばざるべし、

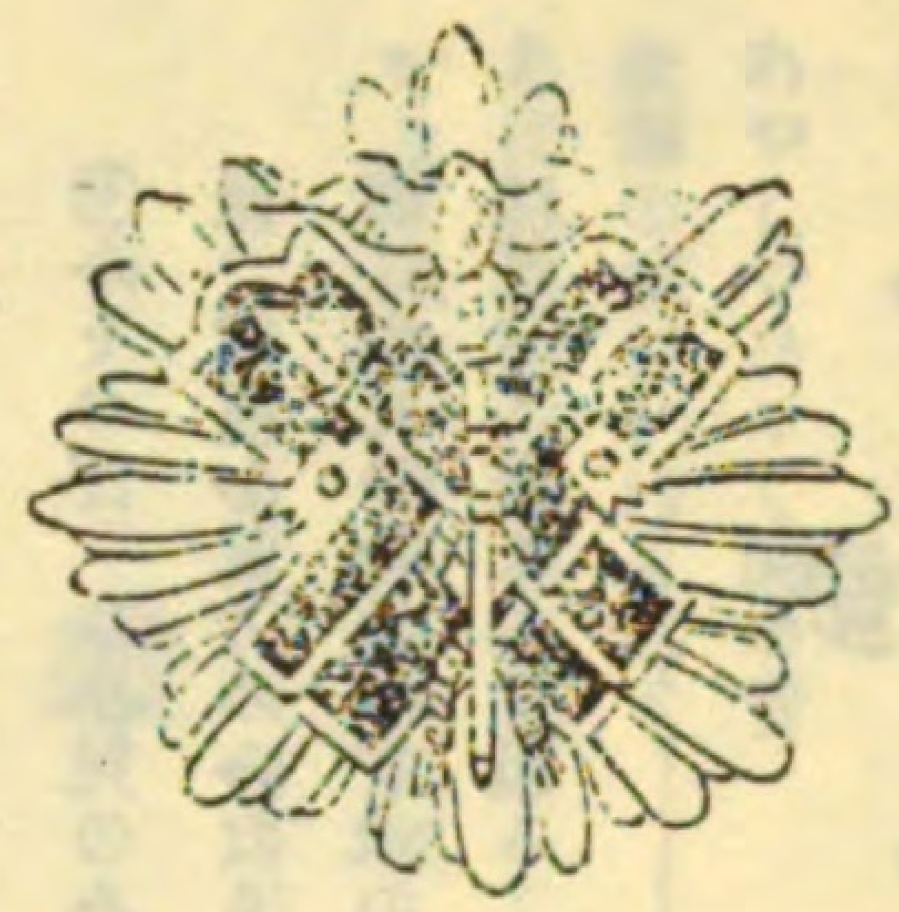
◎同羽織　例の如く黒七子の三ッ紋及び五ッ紋にして其紋の大きさは鯨尺九分より一寸、裏は緞子又は繻珍の二種に限る樣なり次きは黒一樂黒羽二重黒秋田等にして紋及び裏は前記さ同樣、以上は普通の好みなるが些しく凝りて好まば胴裏を他の品を用ずして無双仕立さするなり而して胴の摸樣は白又は白茶或は淡鼠地の『ボカシ』縞の巣籠、七草牡丹亂菊古代の桐に鳳凰等の内にて擇まば隨分面白きものならんさて地織は第一、市樂第二諸糸織第三つなぎ糸織等さす次に商人的には、第一結城紬第二節糸織第三糸織又は節糸銘仙の鐵無地等さす裏は前記の緞子繻珍にあらざれば甲斐絹の無地を付合すかた目下の流行なり、



瑞寶勳章

◎婦人もの　(第一)は御召の紋織にして下着二枚を同品の通し仕立にすべし(第二)は同品の上着に同品の胴抜き二枚下着なり(第三)はうづら糸織の上着に古代形の綆紗縮緬を重て着するものも見受られ(第四)縞御召の上着に綆紗縮緬の下着は普通の好みなれど是れには相變らずさ云ふべく

(第五)山系織(八王子製新糸織を云ふ)に縞八丈を合して二枚重に着するもの多し扨其の裾廻しは(第一)より(第三)迄は縮緬の素鼠、梅鼠、利久鼠、貴族鼠、藍鼠を用ゆべく(第四五)は無論花色絹なるべし而して下着の胴に用ゆる品は贅澤にせば緋紗縮緬なれど一般に用ゐらるゝ者は彼の絞り絹とす其色は紫、藤色、鼠、ひわ色、紅等なり袖口は變り色縮緬の裾なれば矢張其品を用ゆべく花色絹の裾なれば例の黒繻子と知るべし

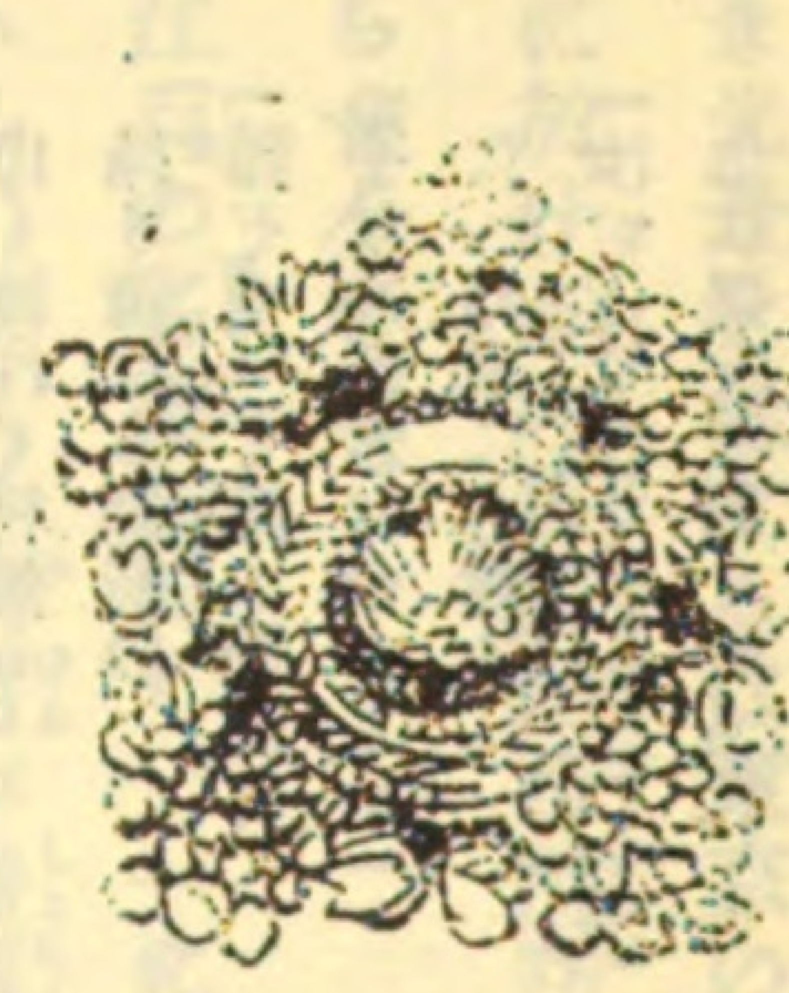


金鵄勲章

◎女羽織　(第一)黒縮緬の三ッ紋(第二)同品の五ッ紋(第三)小紋縮緬の三ッ紋等にして紋は矢張大なる方流行し其裏は緞子、繻珍、綸子等なるが随分贅澤に好みて前記せし如く無双にするもの多く其胴の模様は一躰に優美なる形を好むもの多し勿論此の無双仕立は黒の五つ紋に多き様なり

流行の長襦袢

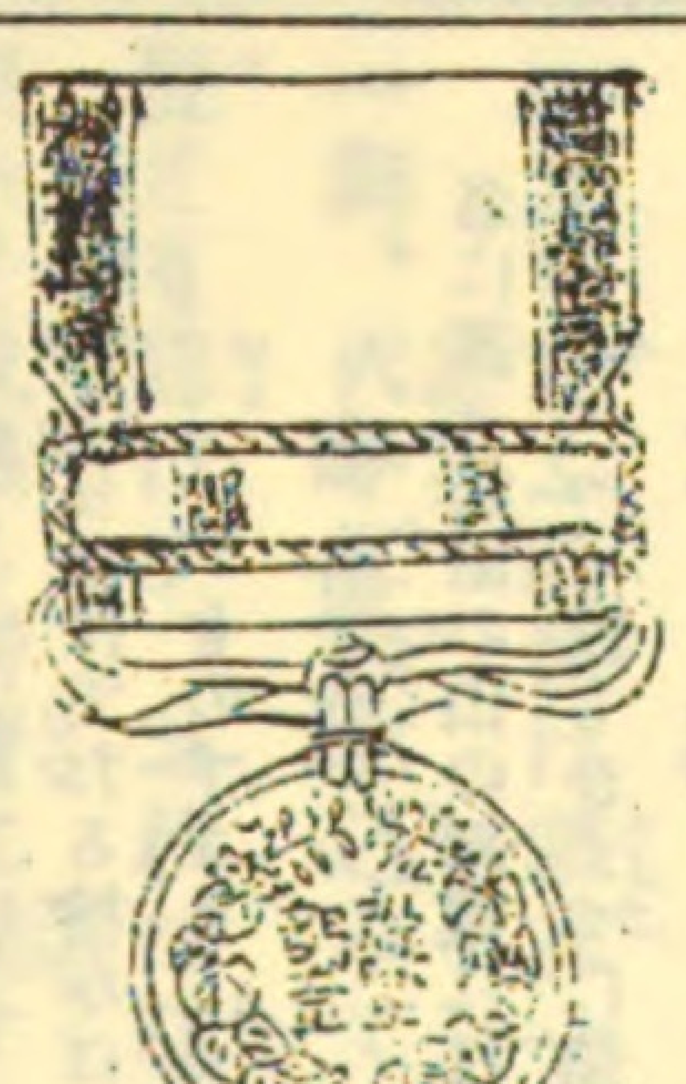
贅澤なる近來二三の流行品を案内せば(第一)は男の長襦袢にして此地質は云ふ迄もなく縮緬なるが昨今流行し及び流行なさんとする形は裾を無地にして背より袖に懸けて菱形或は松川菱、菊、櫻、牡丹、松、等を蔭形に染出せしもの多し亦些しく地味にせば紫鼠の無地(第二)は女物長襦袢なるが其好みは種々あれど友仙或は緋紗縮緬にても裾廻しを同品にて即ち引返しに仕立たる物多し(第三)男ものゝ長胴着にして是は前の長襦袢と同様のものに綿を薄く入れしものなり(第四)男物普通の胴着なるが此の地質は山系織の破れ格子など第一の流行にして次は緋紗縮緬の古代形とし其次は京御召縮緬の淡白なる棒縞の類とす去れど以上は普通の好みにして敢て珍奇にあられど下に記す如きは實に贅澤の限りとや云はんか絶頂とも言はんか即ち其地質は羽織の裏に用ゆる緞子を丈け長く綿を薄く入れて胴着に仕立てたるものなり是れを着するものは相場社會の人物か、好奇の紳士連がいづれそんな畑に見受らる、



寶冠勲章

七歳祝の簪

七五三の祝着は巳に案内し置きぬ、こゝには祝賀の簪をしなりせん。



従軍記章

花附本甲なれば申分なけれど、通常はキセ甲(但し脚は卵甲)が花ともに卵甲なり、流行の花は菊に小鳥、菊と梅、菊鶴、松竹梅鶴、桐に鳳

凰、紅葉又は牡丹に尾永鳥等花の廣さは一寸七分以下二寸（但し二寸のものは島田挿さもなる）脚の長さは四寸五分より五寸五分に至る、近來七歳着の祝衣を本裁に仕立置くが如く簪も脚を長く誂へ置き成長の後も應用の出來るやうにするこさ流行す、花のトメは「しもく」よりも「つぼ」の方よし、尾張町白牡丹本舖の報によれば本甲にて七圓以上十二三圓、鼈甲七甲、卵甲二圓以上四圓なりさ、同じ花にて向挿もはやる花櫛は縮緬細工か、金銀モール製、形は菊第一を占む、

◎みそつぱ　小兒のみそつぱは顔貌の美を失ひ生長の後、齒並を亂るのみならず大に齒根を毀るに至る、其原因は小兒の時餘り甘味の飲食物又は運動不足又は飽衣又は温室に居るより起るこさ多し注意すべし

歌苑

秋吟　（在淸水滝無邪氣生）

淸見潟月かげ淸き秋の夜は
心もいどゝすみまさるかな

虫の音のしげき野末にうかれ來て
歸る家路を忘れけるかな

手折らんさすれどもおしき野邊の菊
ながむる人のなきさ知りつゝ

時雨　（月のやよら）

れさめして物思ふ夜半の村しぐれ
もらでも袖のぬれわたるなり

冬月　（同）

木枯のはらひはてたる梢なば
ものすさまじくてらす月かな

山紅葉　（攝津池田　鹽川逵）

名に高き箕面の山の紅葉には
雲もひさつに染め渡しけり

紅葉

村時雨いつしか暗く水煙
たつ瀧つせをてらすもみぢ葉

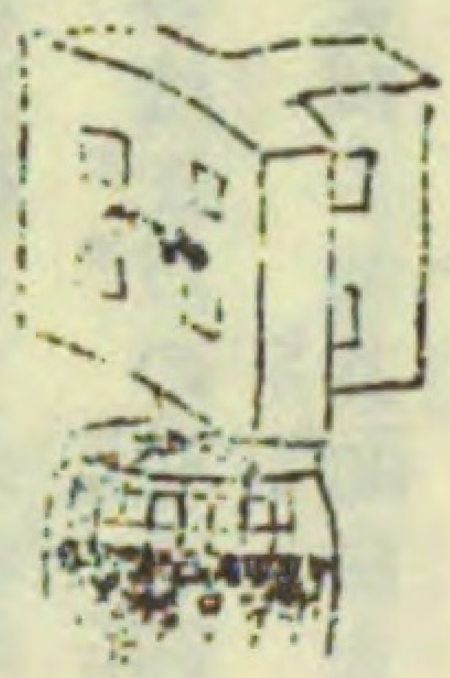
○露營の夢　（在臺灣　松　琴　生）

八重の白雲踏み分けて　いつしか來ぬる故郷の
山も流れも村里も　昔しの樣に見ゆるなり
綠り茂れる森影の　伏せ家の軒をおさなへば
「誰ぞや」さ應ふ聲高く　開く門の戸さしおそし
「子なり母君なつかしや」　あさは言葉もくごもりて
たへぬ思に白露の　すがる袂に置きまさる
「汝か○はるばるいかにして　何時歸りしぞ。高砂の
仇は強しさ聞くからに　壘を烈しさ聞くからに
相見んこさも片糸の　よるべなき身さ思へした
恙なきこそうれしけれ　父も來ましれ妹も來よ
弟はあたりをかけめぐり　村の人々呼び集ひ

子の恙なき祝ひにさ　宴の席ろ開きてん
さく々行きれさくせすや』　云へさ弟も妹も
はからず過へしうれしさに　立ちもえさらすたらちれさ
さもにかたへにはべりつゝ　如何にさ問ふも涙なり
やかで訪ひ來ろ村人や　したしき族や朋友の
喜び祝ふかの中に　戀しき妹子も立てろなり
酒酌みかわし問ふ人も　過ぎにしこさの數々や
戰さがたりに夏の夜の　明け易きをや恨むらん

＊　＊　＊　＊　＊　＊

あやしやひゞく銃の音　仇かさあたりをながむれば
故郷の樣はかげもなく　たのしきむしろも消えはてゝ
あはれはかなき夢の跡　夜をいましむる陣營の
かゞり火のかげかすかにて　虫の聲のみ澄みまさる



雜録

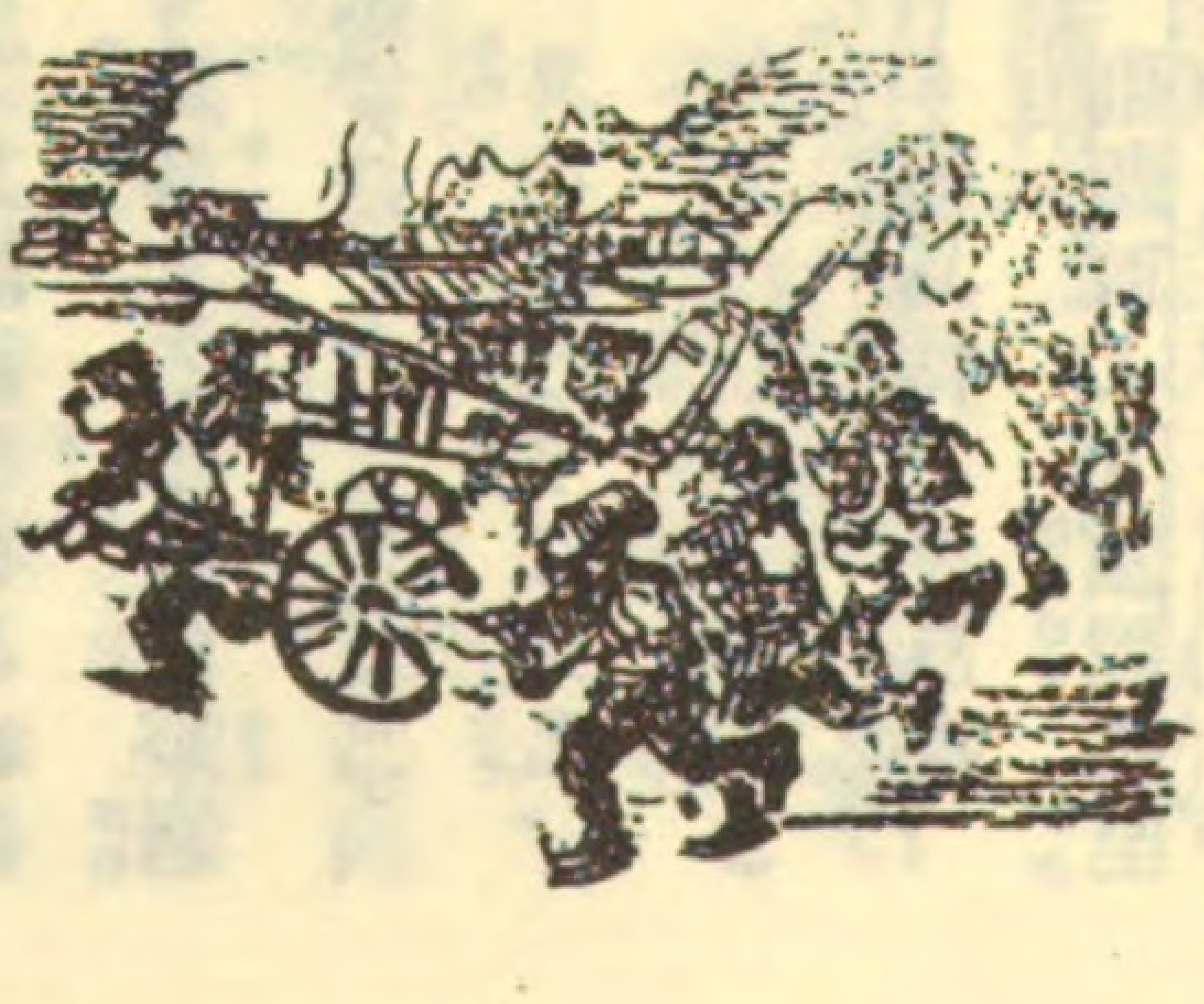
東京の火事

斬馬劍禪

東京は冬になると追々火事沙汰絶えず毎夜二三所に始り、ジャンジャンの鐘聲耳を劈き、其騷々しさ、人騷ぎ人走り、消防夫は勇聲を發して火事場に馳けつけ、高張軒にかゝり、提灯空中に飛び人車衝突宛も戰場の如き光景を呈するは東京の火事なり、さてこれより東京に於ける火災消防及消防夫の事情を少しばかり報じ參らせんか

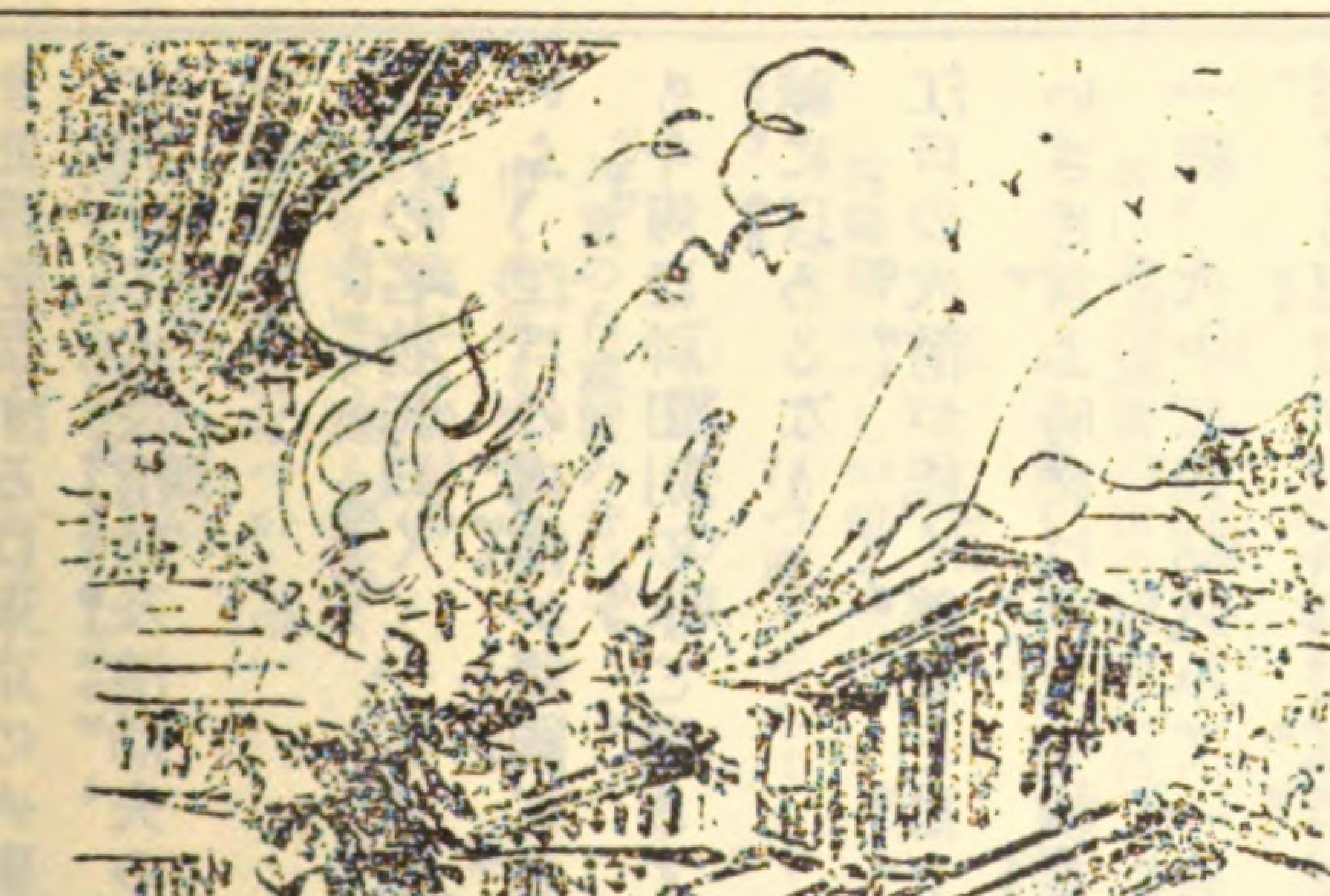
江戸の名物に曰く、一に火消、二に紫、三に東錦繪といふ、江戸の火消が諸國に名高く、徳川の水涸るゝとも今尙ほ神田川の水と盡きず、其名人口に膾炙するは誠に以あるなり

江戸の火消が能く義氣を重じ、いざと言ふ時には差衣一枚鳶口一挺、火中に飛び込みて一命を屁とも思はず、おれは江戸ッ子だいと威張る所實に愛するに堪へたり、併しながら明治の今日に於ては世は文明となり家は煉



火となり、火の用心嚴重に消防器械整頓せしがば、火事は江戸の花と稱へし程には火消の氣焔揚らざれど、まだ〳〵其面白き氣風を市中各所に存せり。

昔は火消組をいろは四十八組に分れて江戸の火事を引受けたれども、今日は東京市内を第六區に分ち第一區を日本橋、京橋、神田とし第二區を芝、麻布、第三區を麹町、赤坂、四谷、第四區を牛込、小石川、本郷、第五區を淺草、下谷、第六區を本所、深川とし（勿論市區を以て定めず、或區と或區と相交はれる所あり）此纒數（即ち組の數たとへば舊よ組が改正して一番組、い組改正して第一大區二番組、も組改正して五番組又はぬとると合して第五大區六番組又はあ、し、え合して第二大區六番組となりたり）四十本、一本の纒に四十一人の消防夫と定りあれば、目下消防夫の總數は千六百四十人の勘定となる、而して一組の內には頭取副頭取合せて六人、道具持六人（纒、梯子を持つもの）人足あり、扨如何なる順序によりて其役割となるかを記せば頗ぶる儀式あり、頭取まで立身するは官吏が鰡登りに上進するが如く、中々一足飛といふ譯に參らず、



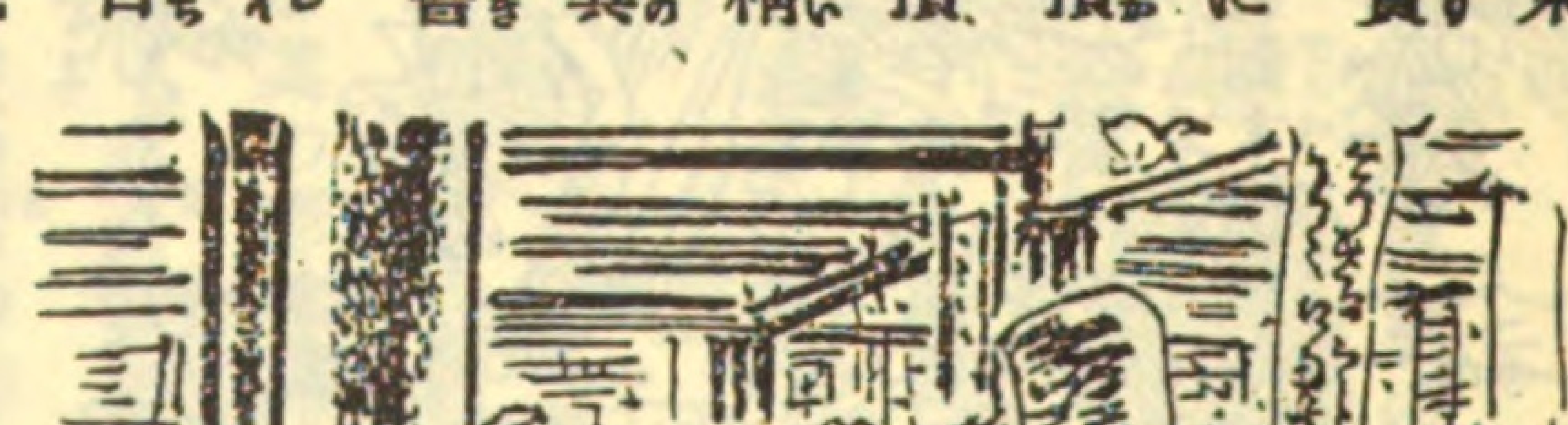
其次第は下は人足、其上は刎丁、それより道具持、世話番、副頭取より頭取に至るまで、欠員なければ何時までも居据りあれば、人望にて順〳〵に經上り、頭取となるまでには到底頭の禿ざるを得ず、頭取も好き頃を見切て辭職すれば隱居役となるなり、而して消防夫が道具持以上となれば、組の內外に權威が利く代りには、新參

ものは他組の古參同役より苛めて見らるゝ事宛も番幕の頃藩々の留守居番が他に出でゝ壓制を受くるが如しと雖も、消防夫が斯る顔役となるは一代の名譽と心得居るなり。

東京呉服賣出の景況

東京各呉服店にては例年夏物は六月一二三日、冬物は十一月一二三日の三日間（勿論商家によりては異なれど夏冬三日間は賣出を爲す、呉服屋に限らず諸品勸工場にも賣出を爲す）景氣能く賣出しを爲す、其日は朝まだきより開場し夜に入りて高張、紅提燈を點して光彩を添ゆれど大家にては夜中商ひなし

東京の婦人が賣出に行くことは一種の娯樂に屬す、此日妻君は兒女を携へ美衣を飾へして各々好む所の呉服屋に至りて其欲する所を求む、而して如何なる順序によりて求むるかといふを見るに、來客混々人群漫々たる足元には呉服太物落花狼籍たる間に自づから好む所の品物を賣場へ約束し、之を持參して賣上方に廻り、此所にて書附を受取り品預り所へ行き品物を預け、勘定方が再び精算の後勘定方にて其代を拂ひ、附方へ書附を廻し、附方終れば其品物を持て出口品引合方に行き、風呂敷の内なる物品と勘定證とを引合せられて店前に出るといふ頗る面倒なるやうなれど規律整然として毫も紛擾を生ずることなし、萬に上る客なれば是非ともか

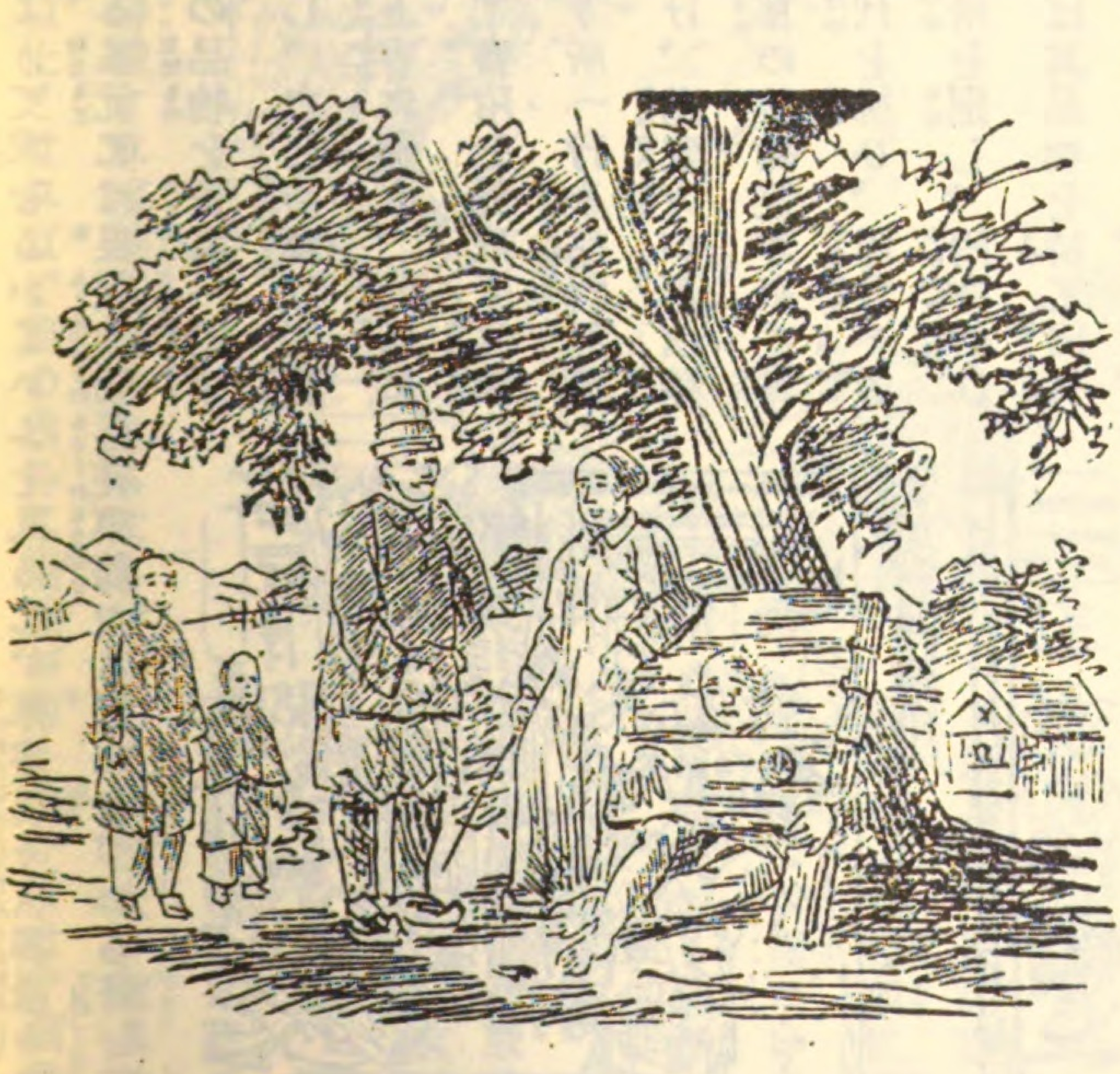


ゝる組織ならざれば往々紛擾を生ずる患あり、大呉服店にては當日巡査、刑事係數名を雇ひあれども、掏摸の難を免れずといふ

本月一日より三日間白木屋にては例年の通り賣出を爲せしが店員を賣上方十二人、品預り方七人、勘定方六人、つけ方五人、出口引合方四人、切方四人、見張方三十人、賣場二十個所（一個所三人）小僧總員は物品の出入を司り二階は膳部係三人、給仕方三十人、臺所料理方二十五人（十五圓以上買物ある人には二階にて酒肴を出して饗應す、三日間二階に上りし來客三千三百二十一人なりしと）を以て來客に接したり、本年は昨年より來客二割方も多く初日は一萬人以上に上り現金賣上初日目二萬二千圓餘、二日目一萬三千圓餘三日目九千圓餘三十日拂ざつと二萬圓を見積れば總計六萬四千圓なり、以て其盛大を見るべし、越後屋大丸にても右の如き盛況なり、越後屋にては本年より其二階にて西洋風（則ち勧工場風）の商内を始めたり

支那人の刑罰

支那政府は種々なる刑罰を行ふが圖に示せるは、厚板



を首に懸け、大道に曝して諸人の見戒となす圖の如き有様なれば自身にて食事すること能はざれば偶々其子が父を養ふを見受けらる、勿論罪人は身動きへ自由ならねば、食事等は獄吏之を司るといふ

十一月十五日（口繪のゑとき）

年の十一月十五日は七五三の祝賀として七歳三歳の女子又は五歳の男子ある家が、無事安全に成長したる祝賀として、其氏神に參詣す、可憐なる見女の手を携ふる親達の樂み蓋し窮りなかるべし



時事一斑

北白川宮殿下の御薨去

近衛師團長北白川宮殿下には台灣より去五日午前一時二十分横須賀へ御着の處同午前七時十五分薨去あらせられたり、明十一日午前九時御邸御出棺豊島陵（音羽護國寺）に於て國葬式を御執行の由承はる

奇菌

去月十三日麻布宮村町長玄寺内に一個の奇菌顯はる其の形躰宛然人類の髑髏の如し、此奇聞を聞きて來觀するもの日々堵の如しといふ

アポットの怪力

世界に鳴り轟きし女姓怪力家ア





ポット來朝し神田錦輝館に於て二週間の興行を試み、其奇術を見せて喝采を博しぬ、其怪力につき種々の説新聞紙上に論せられぬ、世界の學者等之れを電氣力と言ひ神經の作用といひ或は降神術など丶言ひはやせしほどの怪力なり



社告

新年附錄 短篇小說募集

一吾社は未だ世に名の知られざる文士人才あるを信ずるが故に其錦心繡腸を公にせんが爲に特に新年附錄短篇小說を募集す

一報酬にあらず其優等を旌はさんがため左の賞品を定む
（甲）家庭叢書全部十二冊、風雲漫錄及第五國民小說（乙）吉田松陰及第五國民小說（丙）平民叢書、青年叢書、家庭叢書の內希望のもの四冊

一文躰は何たるを撰ばされど書躰分明なるを要す、制限は三十九字詰十六行一ペーヂの割にて十ペーヂ以下を限る

一本名匿名共に宿所番地の明記を要す、締切期限は十二月十日を限る

一投書家には男女を撰ばす

每號歌苑の欄を設け汎く世間に三十一字及新躰歌（短歌）を募集す

十一月十日

家庭雜誌社

